

30 『ナツヤスミ語辞典』 成井豊

○ ジャンル / ファンタジー

○ ストリー / カブト・ヤンマ・アゲハは中学2年。夏休み、水泳嫌いのヤンマは、水泳の補習に出るのがいやで、プールの水を抜いてしまおう。罰として、プール掃除を命じられたヤンマに、カブトとアゲハも付き合うことに。そこへ、白い服を着た男が現れ、3人に話しかける。男はウラシマと名乗り、カブトが持っていたカメラで写真を撮る。その晩、カブトが現像してみると、そこに写っていたのは15年前の景色だった……。

○ 出演者 / 男7 + 女11 = 計18

○ 上演時間 / 90分

登場人物

カブト (中学2年)

ヤンマ (中学2年)

アゲハ (中学2年)

クサナギ (俳優・元産休代用教員)

ウラシマ

ナナコ

ムロマチ (カメラマン)

アヅチ (ムロマチのアシスタント)

モモヤマ (ムロマチのアシスタント)

ミドリ先生 (英語科教諭・カブトの担任)

アオタ先生 (体育科教諭)

カニタニ (中学2年)

郵便屋  
アゲハの母  
ヤシマの母  
ウスイケ母  
サルサワ  
(女優)  
(魚屋)  
(中学2年)  
(中学2年)

カブトがやってくる。地面に、麦わら帽子が落ちていることに気づく。周囲を見回す。麦わら帽子に歩み寄り、拾い上げる。と、その下に、カメラが置いてあった。カブトがカメラを持つ。ファインダーを覗き、シャッターを切る。そこへ、たくさんの人々がやってくる。カブトのそばを次々と通りすぎる。カブトは一人一人にカメラを向け、シャッターを切る。そこへ、ウラシマがやってくる。カブトはウラシマにカメラを向ける。が、ウラシマはカブトに背を向けて、シャッターを切らせない。カブトがウラシマに呼びかける。が、ウラシマは行ってしまふ。そこへ、ミドリ先生がやってくる。カブトの周りには、中学生五人だけが残る。

ミドリ先生 大掃除は終わったか！

六人 オー！

ミドリ先生 机の中も空っぽにしたか！

六人 オー！

ミドリ先生 教科書もテストも、給食の残りのカビの生えたパンも入ってないな？

六人 オー！

ミドリ先生 通信簿も、忘れたフリして、置きっ放しにしてないな？

六人

ミドリ先生

六人

ミドリ先生

ウスイケ

ミドリ先生

カニタニ

ミドリ先生

カニタニ

ミドリ先生

カニタニ

ミドリ先生

六人

ミドリ先生

アゲハ

カニタニ

アゲハ

オー！

後にどんな悲劇が待っているようにと、ちゃんとお母さんに見せるんだぞ。

オー！

それじゃ、これで一学期はおしまい。学級委員の号令で、気をつけ、礼をした瞬間から、待ちに待った夏休みの始まりです。ウスイケさん。

気をつけ。礼。

ってウスイケさんが言うまでは、まだ夏休みは始まりません。

先生、早く礼をしましょう。

カニタニさん、焦っちゃダメ。夏休みはすぐそこまで来てるんだから。

でも、私、もう待てません。

どうして？

だって、私、この日が来るのを、一年も前から待ってたんです。去年の九月

一日から、次の夏休みまであと三二六日、あと三二五日って。

そして、今日が最後の一日。あとほんのちよつと我慢すれば、夏休みが始まるのよ。うれしいでしょう？ うれしいでしょう？

うれしいです！

わかる。みんなの気持ち、よくわかる。でもね、そんなふうに夏休みが待ち

遠しいって思えるのも、もしかしたらこれが最後。来年の夏休みは、誰も待ち遠しいとは思わないでしょう。なぜなら、三年生は受験の季節。夏休みだ

って、毎日毎日勉強で、遊んでる暇なんか一日もないんです。

いいえ、私は来年も遊びます。

そんなことを言ってる余裕があるのかしら。今の成績で。

あら、国語のテストが十八点だった人に、とやかく言われたくないわ。

カニタニ

何だと？

ミドリ先生

だから、やっぱり今年が最後。最後だから、学校とか宿題とかこれからの人生とか、面倒臭いのは全部押入れに放り込んで、一夏まるごと遊んでやれ！

六人

オー！

ミドリ先生

と思ったのが、転落への第一歩。統計によりますと、十代の少年少女が最も非行に走りやすい季節がなんと、中学二年の夏休み。今年の夏は、人生八十年の中で、一番危険な夏なんです。危険な夏休みを安全に過ごすには、どうしたらいいか。私が出した答えは、夏休みの計画表。さあ、みんな、持ってきて！

六人が奥へ走り去る。

ミドリ先生

計画表なんて、普通は小学生が書くものかもしれません。でも、暴走族に入って、警察に補導されてから、「あの時、計画表さえ書いておけば」って後悔しても遅いんです。備えあれば憂いなし！

六人が戻ってくる。手には、大きな白い紙を筒形に巻いたもの。ミドリ先生の合図で、六人が紙を広げる。夏休みの計画表が、色とりどりに描いてある。

ミドリ先生

それじゃ、まずはヤマダさんの計画表から見せてもらいましょうか。

ヤンマが前に出る。他の五人は座る。

ミドリ先生

えーと、七月二十一日、こころ、羅生門、黒い雨。二十二日、ハムレット、罪と罰、若きウエルテルの悩み。何よ、これ。本の題名ばかりじゃないの。

ヤンマ

新潮文庫の百冊です。

ミドリ先生

まさか、一夏で百冊制覇するつもり？

ヤンマ

一日に三冊読めば、十分可能な数字です。

ミドリ先生

中には読まなくていい本もあると思うけど。まあ、ヤマダさんの健闘を祈りましょう。それじゃ、次はオオシマさん。

アゲハが前に出る。ヤンマは座る。

ミドリ先生

えーと、七月二十一日、築地本願寺。二十二日、増上寺、寛永寺、浅草寺、柴又帝釈天。今度はお寺の名前ばかり。まさか、これ全部お参りしようって言うの？

アゲハ

お参りじゃなくて、幽霊に会いに行くんです。

ミドリ先生

幽霊に？ ちよつと待ってよ。いくら夏は幽霊の季節だって言ってもね、昼間からは出ないわよ。

アゲハ

よく見てください。この表は、夜の六時から朝の六時までのスケジュールなんです。

ミドリ先生

一夏丸ごと夜遊びするわけ？

アゲハ

遊びじゃありません。研究です。ムロマチさんにカメラを借りて、ちゃんと写真も撮ってきます。先生にも一枚あげましょうか？

ミドリ先生

写真より、計画表がもう一枚ほしいな。朝の六時から始まる計画表が。

アゲハ

それだと、睡眠だけになっちゃうんですけど。

ミドリ先生

だったら、計画そのものを変えなさい。おいおい、もつとまともなのは

カニタニ

私のはまともです！

サルサワ

私も！

ウスイケ

私も！

カニタニ・サルサワ・ウスイケが前に出る。アゲハは座る。

ミドリ先生

あら、本当。宿題、部活、おうちのお手伝い、ちゃんと四十日全部埋めてあるわね。これは三人ともハナマルかな。

アゲハ

でも、これ、みんな、字が同じ。

カニタニ

バカヤロー！

ミドリ先生

カニタニさん、この三枚は誰が書いたの？

ウスイケ

(手を挙げて)私です。

ミドリ先生

ウスイケさん、学級委員のあなたが、どうしてこんなことをしたの。

ウスイケ

計画表を書くのが楽しくて、つい他の人の分まで書いてしまったんです。

ミドリ先生

わかる。あなたの気持ち、よくわかる。でもね、カニタニさんの夏休みは、

カニタニさんのもの。サルサワさんの夏休みは、サルサワさんのもの。あなたが計画を立てられるのは、あなたの夏休みだけなのよ。カニタニさん、あなたも、それからおオシマさん、今日は全部書き直してからでないと、帰れませんからね。それまで、夏休みはお預けよ。

カニタニ

そんなあ。

ミドリ先生

あれ？

ミドリ先生がカブトに歩み寄る。

ミドリ先生 ムロマチさん、あなた、何にも書いてないじゃないの。

カブト はい。

ミドリ先生 はいじゃないでしょう。どうして計画を立てようとしなの。

カブト 計画は立てました。

ミドリ先生 立てたなら、書けばいいでしょう。

カブト 書けないんです。

ミドリ先生 どうして。

カブト 何が起るかわからない、そんな夏休みにしたいと思ったから。

ミドリ先生と六人の中学生が去る。

松葉杖をついて、クサナギがやってくる。

クサナギ

人間の体が、こんなに壊れやすいものだとは思いませんでした。刑事ドラマの犯人役で、東京駅のロケ。階段をタッタタッタって駆け降りて、一瞬後ろを振り返るってカットだったんですけど、途中で一段踏み外したんですね。危ない、危ないって思いながらも、勢いがついてるから止まらない。しかし、僕は最後まで諦めなかった。残り五段でとところで、一気にタンツて跳んだんです。着地は見事に決まりました。タンツて跳んで、ブチ。イヤな音だった。アキレス腱で太いですからね。カメラさんにもよく聞こえたそうです。こうして、大学卒業以来、久しぶりの夏休みがやってきたわけです。

クサナギが座る。そこへ、郵便屋が自転車に乗って、やってくる。

郵便屋

クサナギ

（周囲を見回して）あの、こちらのお宅の郵便受けは？

郵便屋

は？

クサナギ 遅いって言ったんだよ。本当なら、その手紙は一週間も前に届くはずだったんだ。どうしてこんなに遅くなったんだ。理由を説明しなさい。

郵便屋

クサナギ

郵便屋

そう言われても、僕にはちよつと。

まさか、わざと遅らせたんじゃないだろうな？

わざと？

僕に意地悪するためにさ。僕がいつも郵便番号を書かずに手紙を出すから、仕返ししてやろうって。

バカなことを言わないでください。配達が遅くなったのは、郵便局のせいじやありません。消印だって、昨日の日付になってますし。

消印までごまかすとは、手が込んでるな。

ごまかしてません。

あくまでシラを切るつもりか。まあ、今日のところは許してやろう。ほら、早くこつちへ持ってきなさい。

先を急いでるんですよ。自分で取りに来てください。

遅くなつて悪かつたと思つてるなら、ここまで持つてこいよ。

別に悪かつたとは思つてません。

お、居直るのか？

だつて、悪いことは何もしないんですから。僕は郵便配達の仕事に誇りを持つています。目標は宇宙一の郵便屋です。

それなら、配達される人のことも、少しは考えたらどうだ。(松葉杖を見せる)

なんだ、怪我をしてたんですか。

宇宙一の郵便屋なら、体の不自由な人のために、家の中まで持つてきてくれるでもないんじゃないか？

それくらいは当然のことですよ。(クサナギに歩み寄り、封筒を差し出して)

どうぞ。

（受け取って）ヤマダミユキ？ 誰だよ、この人。

知りませんよ。

僕だって、知らないよ。僕が待っていたのは、こんな手紙じゃない。さっさと持って帰ってくれ。

そんなことできませんよ。

子供の頃、お母さんに言われなかったか？ 知らない人から物をもらっちゃいけませんよ。

でも、これ、女の人じゃないですか。いくら知らない人だって、若くてキレイで独身だったら、話は別でしょう。

名前だけで、どうしてわかるの？ あっ！

もしかして、思い出したんですか？ ヤンマだ。そうだ、ヤンマだよ。確かに、若くて独身だ。でも、あれがキレイって言えるかな。

知ってる人だったら、別に汚くてもいいじゃないですか。汚いなんて失礼だな。この子は僕の教え子なんだぞ。こう見えても、僕は元教師なんだ。教壇に立ったのは、半年だけだったけど。ほらほら、産休代用教師っているだろう？ あれで突然、担任になった。五年三組。やかましい

クラスだった。その中でも特にやかましかったのが、このヤンマでさ。あれ

からもう三年か。

あの、そろそろ次の家へ行きたいんですが。

もう少しいいじゃないか。今、麦茶をいれるから、一休みしていけよ。お気持ちはうれしいうんですが、仕事をサボるわけにはいきません。

郵便屋  
クサナギ  
郵便屋

郵便屋  
クサナギ

郵便屋  
クサナギ

郵便屋  
クサナギ

郵便屋  
クサナギ

クサナギ  
郵便屋

そんなに固いこと言わないで。  
僕は宇宙一の郵便屋ですから。

郵便屋が自転車に乗って、去る。

クサナギ

宇宙一の郵便屋か。僕には「宇宙一の俳優」なんて言えないな。一人で部屋に閉じこもっていると、とつても不安になるんです。このまま一生、役がもらえないんじゃないかって。せつかく先生を辞めて、俳優の道を選んだのに。そんな時に届いた手紙。

クサナギが椅子に座り、手紙を開く。

クサナギ

「暑中お見舞い申し上げます。お久しぶりです、先生。私のこと、覚えてますか？」。覚えてますよ。お勉強が大好きで、すぐにその場で答えられないような難しい質問をいっぱいしてくれた、ヤンマくん。「さて、こうして久しぶりに手紙を書いたのは、別に先生が好きだからじゃありません。国語の宿題が、先生に手紙を出す、必ず封書で、原稿用紙三枚以上って訳のわからないやつで、どの先生に出せて書いてないから、クサナギ先生にしたのです」。そんなの、国語の先生に決まってるじゃないか。「後で文句を言われたら困るので、先生の方から確かに届いたって連絡しておいてください。それでは、さようなら」。さようなら？（一枚目を見る）「と、これで終わってしまっは、枚数が足りません。今日の出来事でも書いて、無理矢理三枚にしましょう。今日は体育の補習で、午後から学校へ行きました」

別の場所に、ヤンマが現れる。

ヤンマ 体育の補習は水泳です。二十五メートル泳げない人は、泳げるようになるまで、この補習に通わなければいけません。

クサナギ 中学生にもなって、泳げない子なんているのかね。

クサナギ ちなみに、私は五メートルしか泳げません。

クサナギ 五メートルじゃ、泳げるうちに入らないよ。

ヤンマ でも、私は別に泳げるようになりたいとは思いません。

クサナギ どうして？

ヤンマ 人間は陸上動物です。二本の足は、陸地を歩くためにあるのです。せつかく

クサナギ 進化して、水から上がってきたのに、またわざわざ水の中に戻ることはないのです。

クサナギ でも、もし溺れたら、どうする？

ヤンマ 私はお風呂以外の水には絶対に近付きません。だから、溺れる心配なんて、

クサナギ する必要なし。

クサナギ 僕が読んでどう思うか、わかっているみたいだな。

ヤンマ でも、補習に出ないわけにはいきません。そこで第一日目の今日は、カブト

とアゲハに付き合ってもらいました。

そこへ、カブト・アゲハが飛び出す。後を追って、アオタ先生・カニタニ・サルサワ・ウスイケが飛び出す。

アオタ先生

ヤンマ

アオタ先生

ヤンマ

アオタ先生

アゲハ

サルサワ

ウスイケ

サルサワ

アゲハ

アオタ先生

ヤンマ

アオタ先生

カニタニ

アゲハ

カニタニ

アゲハ

カニタニ

アゲハ

カニタニ

サルサワ

サルサワ

ヤマダ、おまえはそんなに先生が嫌いか。別に、先生のことは嫌いじゃありません。じゃ、好きか？

私は水泳が嫌いなんです。でも、補習にはちゃんと来しました。中止になるってわかってるから、来たんだろう。

え？ 補習は中止なの？ プールの水がないのよ。

（アゲハに）昨夜、誰かが学校に忍び込んで、プールの水を抜いちやったら

（アゲハに）そうとも知らずに、アオタ先生ったら、いきなり飛び込んだじゃ

だから、頭に包帯を巻いてるんだ。

誰の仕業か、先生には大体見当が付いている。

私がやったって言うんですか？

誰とは言わない。先生は、本人が正直に言ってくれるのを待ちたいと思う。ヤマダさん、先生が怒り出す前に、謝ったらどう？

どうしてヤンマがやったって決めつけるの？ 私たち三人がやってないのよ。残りにはヤマダさんしかいないでしょう？

カニタニさんがやってないって証拠はあるわけ？ 証拠はないけどさ、昨夜のうちに水を抜いておいて、素知らぬ顔で補習に来るなんて、絶対に極悪人の仕業よ。その点、私は、クラスの悪を取り締まる

風紀委員。

私は病を取り締まる保健委員。

ウスイケ

私はその他すべてを取り締まる学級委員。

三人

三人合わせて、二年A組のチャーリーズ・エンジェル。

カニタニ

だから、犯人はヤマダさんなのよ。

アオタ先生

先生は、本人が正直に言ってくれるのを待ちたいと思う。

ヤンマ

先生は、私がやったって思ってるんですね？

アオタ先生

先生は何も思っていない。ただひたすら待ってるんだ。

ヤンマ

でも、さっき、中止になるってわかっているから来たんだろうって言いましたよね？

アゲハ

言った言った。私、覚えてる。

ヤンマ

(アオタ先生に) 先生が生徒を疑っていいんですか？

アゲハ

(アオタ先生に) ヤンマのことを疑っておいて、ヤンマが犯人じゃなかったら、どうするんですか？

アオタ先生

アオタ先生、ピンチ！

クサナギ

拍手する。

クサナギ

そうだそうだ。生徒を信頼しないで、何が教師だ。思春期の女の子は傷つきやすいんだぞ。これで、ヤンマが転落への第一歩を踏み出したら、どうするんだ。

ヤンマ

クサナギ先生はどう思いますか。

クサナギ

僕はもちろんヤンマの味方さ。僕の知ってるヤンマに、そんな悪いことでは

ヤンマ

きない。本当にそう思いますか？

ヤンマ

本当にそう思いますか？

クサナギ

ヤンマ

クサナギ

カブト

ヤンマ

カブト

ヤンマ

カブト

アオタ先生

ヤンマ

カニタニ

アオタ先生

サルサワ

アオタ先生

カニタニ

アオタ先生

アゲハ

僕はヤンマを信頼してるんだ。犯人は、そのカニタニって子だろう。勉強はできなくても、悪いことには知恵が回りそうだ。だから、半年でクビになるんです。犯人は私です。

エーッ！

ヤンマ、そろそろ本当のことを言えよ。

何よ。カブトまで、私のことを疑うの？

だって、ちよっと考えれば、わかるじゃないか。おまえは手ぶらで学校に来

た。水着を持たずに。

いけね。忘れてきちゃった。

水泳の補習に、水着を忘れるバカがいるかよ。中止になるってわかってたか

ら、持ってこなかったんだろう？

（ヤンマに）やっぱり、おまえがやったのか？

そうです。私が水を抜いたんです。

やっぱり、私の言った通りじゃないの。

カニタニ、そんなにムキになるな。確かに、ヤマダのしたことは悪いことだ

が、最後は自分から正直に言ったじゃないか。正直な人間を責めることは、

誰にもできないぞ。

それじゃ、もう怒らないんですか？

怒らないが、反省はしてもらおう。せっかくプールの水を抜いたんだ。ついで

に、プールの掃除をしていってもらおう。

なるほどね。

ムロマチとオオシマもやっていくだろうな？

どうして私たちまで？

カニタニ 犯人を庇っただろう？ おまえらだって、共犯なんだよ。

サルサワ・ウスイケがデッキブラシを三本持つてくる。カブト・ヤンマ・アゲハに押しつける。

アオタ先生 俺たちは体育館へ行って、バスケットをやる。ウスイケ、おまえは図書室

に寄って、ミドリ先生を呼んでこい。教員チームと生徒チームで、対決だ。

ウスイケ ミドリ先生がやりたくないって言ったら？

アオタ先生 その可能性は全くない。なぜなら、おまえが命懸けで説得するからだ。よし、行くぞ。

アオタ先生・カニタニ・サルサワ・ウスイケが去る。

クサナギ

「自分で蒔いた種は、自分で刈り取るしかありません。アゲハはブーブー言いました。でも結構まじめに手伝わってくれました。それにしてもプルって広い。擦っても擦っても、ゴールは遠い彼方。真夏の太陽を浴びて、汗はダラダラ、喉はカラカラ、水をガブガブ、おなかにはタツプンタツプン。でも、アオタ先生が覗きに来ると」

アオタ先生がやってくる。三人がサングラスをかける。

アオタ先生

どうだ、おまえたち。辛かったら、そろそろ勘弁してやってもいいんだぞ。

アゲハ

私さあ、この夏はダイエットしようと思ってたんだ。

カブト

今日一日で、三キロは痩せるぜ。

アゲハ

ラッキー。

ヤンマ

私は海に行つて、日焼けしようと思つてただけど。

カブト

今日一日で、ボブ・サップになれるぜ。

ヤンマ

ラッキー。

アオタ先生

そうか。じゃ、目標が達成できるまで、頑張つてくれ。俺はカニタたちとかき氷を食ってくる。

アオタ先生が去る。

クサナギ 「しかし、さすがに一時間も擦つてると、腰は痛むし、手は疲れるし」

アゲハ ヤンマ、もうそろそろアオタ先生の所に行かない？

ヤンマ 何しに？

アゲハ だから、謝りによ。

ヤンマ どうして私が謝らなくちゃいけないわけ？

アゲハ 口だけでいいのよ。もう充分に反省できました。この辺で勘弁してください  
アゲハ ってさ。

ヤンマ 悪いことをしたら、謝るか、罰を受けるか、どっちかでしょう？ 罰を受け

アゲハ た上に、謝るなんて、絶対にイヤだ。

カブト また意地を張って。そのうち、先生の方から、「もう帰っていい」って言ってくるよ。

アゲハ アオタ、早く来いよ。

クサナギ 「しかし、そこへ現れたのは、全く別の人物でした」

そこへ、ウラシマがやってくる。

ウラシマ 君たち、不良？

アゲハ 不良とは何だよ、不良とは。

ウラシマ だって、その言葉遣いと、そのサングラス。

アゲハ あ、これは、太陽が眩しすぎるから。(サングラスを外す)

ウラシマ それじゃ、君たち、水泳部？

アゲハ  
アゲハ  
ウラシマ  
アゲハ  
カブト  
アゲハ  
ウラシマ  
アゲハ  
カブト  
ウラシマ  
アゲハ  
カブト  
ウラシマ  
アゲハ  
カブト  
ウラシマ  
ヤンマ  
カブト  
ウラシマ  
ヤンマ  
カブト  
ウラシマ  
ヤンマ  
カブト

違います。今日は体育の補習で。  
水泳部でもないのに、プール掃除か。暑い中、大変だね。  
ええ、まあ。

(小声で) 先生か？

(小声で) 知らない。

こんなに暑いってことは、今は夏だね？

ええ。(カブトに) 夏よね？

夏だよ。夏休みなんだから。

へえ、夏休みか。冬休みじゃないのか。

(カブトに小声で) 変な人。

(小声で) 目を合わせないようにしよう。

ねえ、君。君だよ、君。三人の中で、一番足の細い子。

私ですか？

バカ！

(ヤンマに) ちよつとど忘れしちゃったんだけど、今年って何年だっけ？

二〇〇三年ですけど。

こら、大人をからかうんじゃない！

からかってませんよ。ねえ、カブト？

(ウラシマに) あなた、どこの誰ですか？ 用のない人は、学校に入っちゃ

いけないですよ。

本当に、今年は二〇〇三年なのか？

(カブトに) 間違いないよね？

間違いないよ。私が生まれたのが一九八九年で、今年十四になったから、二

ウラシマ  
ヤンマ  
アゲハ  
カブト  
アゲハ  
カブト  
アゲハ  
カブト  
ヤンマ  
アゲハ  
ウラシマ  
カブト  
ウラシマ  
カブト  
ウラシマ  
カブト  
ウラシマ  
ヤンマ  
ウラシマ  
カブト

〇〇三年。

十五日が十五年？ そんな話は聞いてないよ。（座り込む）  
変な人。

ねえねえ、校長先生の話、覚えてる？ 終業式の時言ってたでしょう？  
夏になると、学校の近辺に変質者が現れるって。

こんな真っ昼間に現れるかな。  
カブト、カメラ。

あんなヤツを撮るのか？  
証拠写真になるでしょう？ ほら、早く。

（ウラシマに）すみません、ちよつとこっちを向いてください。  
（ウラシマに）聞こえてるんでしょう？ こっちを向いてよ。

（ウラシマに）おじさんてば！  
おじさんはここにはいない！

（シャッターを切つて）オーケイ、撮れました。もう帰っていいですよ。  
そのカメラ。

私のですけど。  
ちよつと貸してくれる？

イヤです。  
お返しに、君たちを撮ってあげるよ。プール掃除の記念にどうだい？

こんなの、記念にしたくない。  
じゃ、夏休みの記念に。こう見えても、プロのカメラマンだからね。ファッ  
ション雑誌のグラビアみたいに、カッコよく撮ってあげるよ。

お兄さん、プロのカメラマンなの？

ウラシマ  
カブト

ああ。まだ駆け出しなんで、主な仕事は荷物持ちだけだ。要するに、アシスタントか。だから、何もわかってないんだ。いいかい、お兄さん。プロのカメラマンは記念写真なんか撮らないんだよ。

ウラシマ

どうして？

カブト

だって、バカバカしいじゃないか。アルバムに貼るための写真なんて。

アゲハ

写真で、アルバムに貼るために撮るんじゃないの？

カブト

バカ。そんなの、ただの思い出だろう？ 写真は過去を懐かしむために撮る

ウラシマ

んじゃない。真実を捕まえるために撮るんだ。そんなに難しく考えることないんじゃないかな。写真なんて、撮りたいものを撮ればいいんだ。いいものが撮れたら、大切にしたいと思うだろう？

カブト

うしたら、アルバムに貼ればいい。プロはアルバムなんか作らないの。

アゲハ

君がもし真実を捕まえたなら、大切にしたいとは思わないのかな。

ヤシマ

（カブトに）どうする？  
せっかくだから、撮ってもらっちゃおうか。

クサナギが机を叩く。

クサナギ

待って待って！ どうしてそんなに簡単に気を許すんだ。校長先生の話をお忘れた

のか？

でも、そんなに悪い人に見えないし。

ヤシマ

記念写真なんて、きっかけに過ぎないんだよ。何枚か撮ってるうちに、こう

言い出すんだ。自然な感じで撮りたいな。上着を脱いでみようか。

ヤンマ  
クサナギ  
ヤンマ  
クサナギ  
カブト  
クサナギ  
ウラシマ  
カブト  
ウラシマ  
クサナギ  
三人  
ウラシマ  
ヤンマ  
ウラシマ  
アゲハ  
ウラシマ  
三人  
ウラシマ  
アゲハ  
ウラシマ  
カブト  
ウラシマ

先生、やけに詳しいですね。  
僕を疑って、どうするんだ。疑うなら、あの男を疑え。一枚くらいならいいよね。それが転落への第一歩なんだ。  
一枚くらいならいいよね。

あーっ！（頭を抱える）

（ウラシマに）それじゃ、お願いします。（カメラを差し出す）

やめろ、カブト！ やめるんだ！

（カメラを受け取って）いいカメラだね。これ、本当に君のカメラ？

私のだって言ってるでしょう？

それじゃ、自然な感じで撮ろうね。

あーっ！（頭を抱える）

はい、チーズ。（思い思いのポーズで止まる）

自然な感じって言わなかったっけ？

（止まったままで）そんなこと言われても、ねえ。

お、君、なかなかかわいいね。

君って、誰よ。

それはもちろん、三人の中で一番伊藤つかさに似てる子。

（顔を見合せて）誰、その人？

（シャッターを切る）

あ！ 撮る時は、撮るって言ってよ！

（シャッターを切る）

一枚だけって言ったじゃないか！

（シャッターを切る）

ヤンマ  
カブト  
ちよつとちよつと、私も撮ってよ！  
みんな、止まれ！

三人が止まる。

カブト  
どうだ。これなら、撮れないだろう。

ヤンマ  
私はまだ撮ってもらってないよ。(ウラシマに歩み寄る)

ウラシマ  
(シャッターを切る)

カブト  
ヤンマ！

ヤンマ、この時の写真は、もう現像したの？ 僕にも一枚、送ってくれない

かな。

それが、送れないんです。

どうして？

私たちは写ってなかったから。

わかった。フィルムが入ってなかったんだらう。昔のマンガによくあるパタ

ーンだ。

フィルムは入ってました。

それなら、撮れてるはずだらう？

やれやれ、これでどうやら、原稿用紙三枚に到達しましたね。

ちよつと待て。まだ、話の途中だぞ。

国語の先生には、すっかり三枚書いてあつたと伝えておいてください。

中途半端なことをするなよ。三枚以上なら、四枚だって、五枚だって、いい

はずじゃないか。

ヤンマ  
クサナギ  
ヤンマ  
クサナギ  
クサナギ  
クサナギ

ヤンマ  
クサナギ  
ヤンマ  
クサナギ

カブト  
ウラシマ  
カブト  
クサナギ

ヤンマ それじゃ、体に気を付けて、俳優修行に勤しんでください。  
クサナギ そんなことはいいから、続きはどうなったの？  
ヤンマ くれぐれも、怪我だけはしないように。  
クサナギ 怪我はもうしちゃったんだよ！  
ヤンマ 八月十四日、ヤマダミユキ。

クサナギが手紙を閉じる。

ウラシマ あれ？  
カブト まさか、壊したの？  
ウラシマ フィールドがなくなつた。  
カブト あーあ、これ一本しかないのに。  
ウラシマ やっぱりカメラはいいね。この、シャッターを切る音が堪らないんだな。  
アゲハ プロって言っても、いろいろあるでしょう？ 何を撮るプロなの？  
ウラシマ まあ、仕事だから、何でも撮るんだけど、専門は鳥。  
アゲハ 鳥って、スズメとかカラスとか？  
ウラシマ 違うよ。北海道へ行ってオオワシを撮ったり、沖縄へ行ってノグチゲラを撮  
カブト ったり。でも、これが全然、金にならないんだ。  
ウラシマ だから、アシスタントをやってるんだらう？  
カブト まあね。一本立ちできたら、好きな物を好きなだけ撮ろうって思ってたのに。  
ウラシマ お兄さん、名前は？  
アゲハ そうだな。ウラシマなんて、どうか？  
ウラシマ 自分の名前でしよう？

ウラシマ　　ウラシマだ。僕の名前は、ウラシマ。

ウラシマ・カブト・ヤンマ・アゲハが去る。

暗くなる。クサナギが机の上のスタンドを点ける。ハガキとペンを取り出して、手紙を書き始める。

駅長がやってくる。カンテラを左右に振る。カニタニ・サルサワ・ウスイケがやってくる。懐中電灯を左右に振る。駅長が去る。

そこへ、ナナコがやってくる。後を追って、ウラシマがやってくる。ナナコが木の陰に隠れる。ウラシマが去る。カニタニたちが木の陰を懐中電灯で照らす。ナナコが出てきて、カニタニに腕時計を渡す。ナナコが去る。

そこへ、ヤンマがやってくる。木の陰に隠れる。カニタニたちが木の陰を懐中電灯で照らす。モモヤマが出てきて、カニタニたちにカメラを向ける。フラッシュ。モモヤマが去る。

カニタニたちが懐中電灯を左右に振る。駅長がやってくる。カンテラを左右に振る。カニタニたちが去る。駅長も去る。

木の陰から、ヤンマが出てくる。そこへ、モモヤマがやってくる。ヤンマが逃げる。モモヤマがヤンマにカメラを向ける。フラッシュ。ヤンマが去る。

そこへ、ナナコがやってくる。ナナコがモモヤマに話しかける。モモヤマがナナコにカメラを向ける。フラッシュ。そこへ、ウラシマがやってくる。ナナコが去る。後を追って、ウラシマが去る。ムロマチ・アヅチがやってくる。



モモヤマ  
アツチ  
モモヤマ  
ムロマチ  
アツチ  
ムロマチ  
モモヤマ  
ムロマチ  
アツチ  
モモヤマ  
アツチ  
モモヤマ  
ムロマチ  
アツチ  
モモヤマ  
ムロマチ  
アツチ  
モモヤマ  
ムロマチ  
アツチ

うな？

何だよ、写しちやいけないものって。

そりゃ、おまえ、写される方が「写さないで」って思うものだよ。

本人の承諾は取らなかった。

バカヤロー！ おまえは、いつも先生が言ってる言葉を忘れたのか？

カメラは時として、人を傷つけることがある。それは、カメラで頭を殴ると

痛いって意味じゃない。他人のプライバシーに、土足で踏み込むってことだ。

（モモヤマに）たとえば、おまえがお風呂に入っていると、他人に写さ

れたらどうする。

そいつがお風呂に入っていると、写し返す。

それじゃ、何の解決にもならないだろう！ いいか、モモヤマ。本人に無断

で裸を撮るっていうのは、暴力に等しい行為なんだぞ。

おまえは、僕が裸を撮ってきたって言うのか？

こんな夜中に、他に撮るものがあるか。

僕は、裸になんか、興味はない。

嘘をつくな、嘘を。

アツチ君、今のは嘘じゃない。

先生は信じてくれるんですね？

君にこんなに上手に嘘がつけるわけないからね。

（モモヤマに）じゃ、何を撮ってきたって言うんだ。

幽霊を。

幽霊？

クサナギが風鈴を鳴らす。

アツチ

キヤーッ！

ムロマチ

モモヤマ君、君は幽霊なんか信じてるの？

アツチ

(モモヤマに) おまえ、それでも、プロのカメラマンか？

モモヤマ

先生はいつも言ってますよね？ 素人のカメラマンは事実を写し、プロのカ

アツチ

メラマンは真実を写すって。

モモヤマ

幽霊の、どこが、真実なんだ。

アツチ

真実っていうのは、目に見えないものなんだ。しかし、その見えないものが、

ムロマチ

フアインダーを通すと、一瞬見えることがある。(ムロマチに) その一瞬を

アツチ

捕まえられるかどうか、写真の価値を決めるんでしよう？

ムロマチ

しかし、幽霊なんか撮ったって、一銭にもならないだろう。

モモヤマ

大抵は下手くそなトリック写真だけだ。

アツチ

トリックじゃない写真だってあります。ただ、素人が撮った写真じゃ、テク

モモヤマ

ニツクの問題で、信用価値が低いです。

アツチ

そこで、プロのおまえが撮ろうってわけか。

モモヤマ

僕は僕のカメラで、幽霊の存在を証明したいんだ。

ムロマチ

とすると、そのフィルムの中には、幽霊の姿がバッチリ写ってるんだな？

モモヤマ

さあ。白い人影を追いかけて、シャッターをバシバシ切ったんだけど、うま

アツチ

くカメラに入ったかどうか。

ムロマチ

白い人影？ そそそれじゃおまえ、ほぼ本物の、ゆゆ幽霊を見たのか？

アツチ

(モモヤマに) 現像してこい。今すぐ、現像してこい。

モモヤマ はい！

モモヤマが走り去る。

アヅチ  
ムロマチ

写ってますかね、幽霊？

バカ。幽霊っていうのは物質じゃない。精神的な存在なんだ。カメラは物質に反射した光を捉える。精神が光を反射するか？

アヅチ

ということは、もし幽霊が存在するとしても、写真には写せないんだ。写真に写った幽霊は、写ったという時点で偽物なんだ。

モモヤマが走ってくる。手には、数葉の写真。

モモヤマ  
ムロマチ

現像できました！（ムロマチに写真を差し出す）

（受け取って）確かに人影が写ってるね。白いブラウスに、黒っぽいスカート。これはまだ子供だな。

モモヤマ

中学生の幽霊です。

アヅチ

どうしてそんなことがわかるんだよ。

モモヤマ

だって、これを撮ったのは、すぐその中学だから。

ムロマチ

カズコ君から聞いてませんか？

モモヤマ

カズコ君から聞いてませんか？ あの中の中学には、毎年夏になると、幽霊が出るんです。

アヅチ

うわあっ！

ムロマチ

どうした？

アヅチ  
モモヤマ  
アヅチ  
モモヤマ  
ムロマチ  
モモヤマ  
ムロマチ  
モモヤマ  
アヅチ  
ムロマチ  
ムロマチ  
モモヤマ  
アヅチ  
ムロマチ  
ムロマチ  
モモヤマ  
アヅチ  
モモヤマ  
アヅチ  
モモヤマ

こここれなんか、さき三人も写ってます！  
あ、それは別だ。その三人は、僕と同じで、幽霊を待ち伏せしてたんだ。  
おまえみたいな物好きが、他にもいたのか。  
僕が幽霊を追いかけてたら、今度はこの三人が僕を追いかけてきたんだ。僕  
を幽霊だと思っただろうな。だから、お返しにパチリ。  
ということ、この子は幽霊で、この三人は生きてる人間か。  
そういうことになります。  
どこが違うんだ？  
そんなの簡単じゃないですか。三人は僕を追いかけてきたのに、この子だけ  
は僕から逃げた。何か、疚しいことがあったんです。  
夜中にカメラを持った不審な男に出会ったんだ。逃げたくもなるだろう。  
それだけじゃ、この子が幽霊だって証拠にはならないな。大体この子、どこ  
かで見えたような気がする。  
先生の中学時代の同級生じゃないですか？ 失恋を苦にして、校舎の屋上か  
ら投身自殺した子ですよ。  
そんな同級生はいない。  
おい、この最後の一枚はなんだ。これだけ、明るい場所で撮ってるな。  
ああ、それも別だ。帰りに、校門の前で、女の子に会って。  
その子も中学生か？  
いや、歳は僕と同じぐらいかな。「白い服の男は来なかった？」とか、「中  
学生は見なかったか？」とか、しつこくつきまとってきて。  
それで撮ったのか。  
あんまりしつこいから、フラッシュで脅かしてやったんだ。どうだ？ 凄い

ムロマチ  
モモヤマ  
ムロマチ  
モモヤマ  
ムロマチ

顔で写ってるだろう？  
おめでとう、モモヤマ君。

は？

とうとう君は真実を写したんだ。この最後の一枚で。

最後の一枚って、まさか。

街灯に照らされた校門ばかりで、女の子の姿はどこにもない。

ムロマチ・アツチ・モモヤマが去る。

郵便屋が自転車に乗って、やってくる。

郵便屋  
クサナギ

クサナギさん、郵便です。

ちようどいい時に来てくれました。今、ヤンマに返事を書いているところなんだ。もうすぐ書き終わるから、ついでに持ってつてくれない？

郵便屋  
クサナギ

あんまり時間がないんですけど。

大丈夫大丈夫、そんなに待たせやしないから。見てごらん。住所も書いた、名前も書いた、その上なんと、郵便番号まで書いてある。後は中身を書くだけなんだから。

郵便屋  
クサナギ

すみませんけど、先を急いでるんで。

郵便屋  
クサナギ

薄情者！  
は？

郵便屋  
クサナギ

足の悪い人間に、ポストまで歩いていけって言うのか？

郵便屋  
クサナギ

それじゃ、また明日来た時に持っていきますから。

郵便屋が歩き出す。後を追って、クサナギが松葉杖で走る。

クサナギ

明日じゃなくて、今日出したいんだ。手紙の続きが読みたいんだよ。

郵便屋

続きつて、これのことかな。(封筒を取り出す)

クサナギ

僕宛の手紙じゃないか。貴様、配達しないで、そのまま持ち帰ろうとしたな？

郵便屋

忘れてたんですよ。あなたが変なことを言うから。

クサナギ

よこせ。その手紙をよこせ。

郵便屋

そんな言い方をしなくても、あげますよ。はい。(封筒を差し出す)

クサナギ

(受け取つて)オオシマアゲハ？ 今度はアゲハからだ。

郵便屋

また生徒さんからですか？

クサナギ

違う。僕が待つてたのは、こんなやつの手紙じゃない。

郵便屋

一体誰の手紙を待つてるんですか？

クサナギ

仕事の関係だよ。

郵便屋

そう言えば、あなた、何の仕事をしてるんですか？

クサナギ

毎日、こんな時間に家でブラブラしてて、生活の方は大丈夫なんですか？

郵便屋

僕だって、仕事はしたいよ。でも、この足じゃ、怪我人の役しかできないだろう？

郵便屋

え？ あなた、俳優さんなんですか？

クサナギ

アクターって言うてくれないか？

郵便屋

つまり、あなたは、怪我が治ってからやる仕事を探していて、その採用通知を待ってるわけだ。

クサナギ

だから、こんな喧しいやつの手紙なんか、ほしくないんだ。担任だった半年

郵便屋

間、こいつの声にどれだけ苦しめられてきたことか。昨日のヤンマが八十ホ

クサナギ

ーンなら、このアゲハは百ホーン。二日酔いで授業してると、頭にガンガン

郵便屋

響くん

郵便屋

二日酔いで授業をしたんですか？

クサナギ

そりゃ、先生だって人間だもの、お酒くらい飲むよ。うるさいやつにはとびつきり難しい質問をするし、かわいい子には十点でも二十点でもサービスしちゃう。

郵便屋

失礼します。

クサナギ

もう帰っちゃうの？ 今日ほね、ビールも冷やしてるんだよ。

郵便屋

ひいきをする先生のお酒は、飲みたくありません。

郵便屋が自転車に乗って、去る。

クサナギ

何だか嫌われちゃったみたいだな。友達になりたかったのに。仕事もしないで毎日ブラブラしていると、まじめに働いてる人が眩しく見えます。僕も先生をやってる時は、彼みたいに眩しかったのかな。そんな時に届いた手紙。

クサナギが手紙を開く。

クサナギ

「暑中お見舞い申し上げます。ハイ、クサナギ先生、元気？」。元気じゃない。「ヤンマの手紙、もう読みましたか？ 昨日出したって言ってたから、この手紙より一日早く着いたでしょう？ 『なんでクサナギ先生なんかに出したの？ 好きだったの？』って聞いたら、『教師より、元教師の方がマシだから』って言っていました」。マシとはなんだ、マシとは。「私もそれには同感なので、こうして手紙を書いているのです。だから、変な誤解はしないでね」。そんなもの、してたまるか！

別の場所に、アゲハが現れる。

アゲハ

クサナギ先生が主役をやるとは思いませんでした。まさか、一度やってみたかったんだよ、ロミオの役は。

クサナギ  
アゲハ

次に思い出すのは、作文の授業。「テーマは自由だ。何でも好きなことを書いていいぞ」って言って、後は自分の机で居眠り。

クサナギ  
アゲハ

あの日は体調が悪くてね。どうしても立ってられなかったんだ。そのくせ、作文を返す時は、文句ばかり。「好きなことを書いていい」って言ったくせに、「おまえの考え方は間違ってる」って。

クサナギ  
アゲハ

仕方ないだろう。君たちが非常識なことばかり書くから。非常識は先生の方でしょう？ 雑談しない先生は肩が凝って困るけど、雑談

クサナギ

「僕は先生より俳優になりたいんだ」って、顔に書いてありました。バレてたのね。

アゲハ

それではヤンマの真似をして、今日の出来事、行ってみようか！

カプト・ヤンマが飛び出す。後を追って、アオタ先生・カニタニ・サルサワ・ウスイケが飛び出す。

アオタ先生

ヤマダ、おまえの気持ちはよくわかった。やっぱり、おまえは先生が嫌いな

ヤンマ

んだ。また私を疑うんですか？

アオタ先生  
カニタニ  
サルサワ  
アゲハ  
ウスイケ  
アオタ先生  
ウスイケ  
アオタ先生  
カニタニ  
アオタ先生  
サルサワ  
ウスイケ  
カニタニ  
ヤンマ  
カニタニ  
ヤンマ  
アオタ先生

他に誰がやるって言うんだ。  
ヤマダさん、あなたには前科があるのよ。まず最初に疑われて当然でしょう？  
（カブトに）アオタ先生ったら、またいきなり飛び込んだんじやって、昨日よりもっとひどい怪我をしたのよ。  
そう言えば、包帯の数が大分増えてる。  
どうせまたやるんじゃないかと思ったのよね。だから、昨夜はプールに張り込んで。  
おまえたち、夜中に学校に来たのか？  
八時頃から、三人で更衣室に隠れてたんです。ヤマダさんが来るんじゃないかと思つて。  
それで、何か見たのか？  
（腕時計を示して）十二時頃、校舎の裏から黒い影がスーッと現れたから、「そら、捕まえる！」って追いかけたんです。校庭の隅に追い詰めて、懐中電灯で照らそうとした瞬間にピカリ！  
ピカリ？  
カメラを持つてたんですよ。  
（アオタ先生に）目の前が真っ白になっちゃつて、その隙に逃げられました。ムロマチさん、あなたがカメラを貸したんでしょう？ やつぱり、あなたたち、共犯なんじやない。  
それは私じやないよ。  
まだ言い逃れするつもり？  
確かに、私はプールの水を抜いたけど――

ヤンマ (カニタニに) カメラは持って行かなかった。その人、私を追いかけてきたのよ。

カニタニ 何言ってるの。あんたを追いかけたのは、私たちよ。

アゲハ わかった。カニタニさんたちが追いかけたのはカメラを持った誰かで、その誰かが追いかけてたのがヤンマなのよ。

サルサワ その誰かって、誰よ。

アゲハ さあ。

アオタ先生 先生には大体見当がついている。

ウスイケ 誰なんですか？

アオタ先生 幽霊。

六人 幽霊？

クサナギがシンバルを鳴らす。

カニタニ キヤーツ！

アゲハ 凄え！私、一度でいいから、幽霊を見てみたかったんだ。

カニタニ おまえ、怖くないのか？

アゲハ どうして怖いのか？別に、襲われて、とり殺されるってことはないでしょう？

アオタ先生 まあ、おまえたちも命に別状がなくてよかった。ところで、ヤマダ、幽霊の話が始まる前に、何か言わなかったっけ？

ヤンマ 言いましたっけ？

アオタ先生 確か、プールの水を抜いたのは自分だって。

カニタニ ヤマダさん、再犯の罪は重いのよ。

カブト  
（アオタ先生に）でも、プールは昨日、掃除したばかりですよ。

カニタニ  
トイレの掃除はしなかったでしょう？

アゲハ  
よかった。トイレだけなら、十五分で終わるよ。

カニタニ  
十五分じゃ無理よ。うちの学校のトイレは十カ所もあるのよ。

アゲハ  
それ、全部やれって言うの？

カニタニ  
自業自得よ。女子トイレだけじゃなくて、男子トイレもやるのよ。職員トイレもやるのよ。

アオタ先生  
カニタニ、おまえが判決を下すな。今日はトイレ掃除じゃなくて、図書室の

整理をしてもらう。ミドリ先生のお手伝いだ。

カニタニ  
そんなの、昨日より楽じゃないですか。

アオタ先生  
図書室っていうのは、昼でも暗いし、空気もひんやりしてるだろう。

ウスイケ  
幽霊の好きそうな場所ですね。

サルサワ  
日が暮れるまでに終わらせないと、ご対面ことになるわね。

アゲハ  
いいわよ。私はご対面したいんだから。

アオタ先生  
オオシマ、ミドリ先生に会ったら、こう言うんだ。「アオタ先生の命令で来

ました。奴隷だと思って、好きに使ってください」って。

カニタニ  
私たちはまたバスケットですね？

アオタ先生  
いや、今日はグラウンドに行って、野球をやるよ。おまえたちに、本物の千本

ノックを体験させてやる。よし、行くぞ。

アオタ先生・カニタニ・サルサワ・ウスイケが去る。

そこへ、ミドリ先生がやってくる。エプロンをしている。

ミドリ先生 ちよっと、あなたたち、運ぶのを手伝ってちょうだい。

ミドリ先生が去る。後を追って、カブト・ヤンマ・アゲハが去る。

クサナギ

「ミドリ先生は大張り切りで、『三人も手伝ってくれるなら、書庫の奥の方に溜まっている本を、まとめて整理しちゃいましょう』って、私たちを扱き使います。この先生はとっても仕事熱心なんだけど、ひたすらマイペースなので、合わせるのが大変です」。そうは言うけどね、こっちだって、生徒に合わせるのは大変なんだよ。特に、君たちみたいな生徒は。

ミドリ先生・カブト・ヤンマ・アゲハが戻ってくる。手にはたくさんの本。後から、ナコもついてくる。

カブト 先生、これ、全部、捨てちゃっていいんですか？

ミドリ先生 まさか。そんなもったいないことをしたら、もったいないおぼけが出るわよ。

カブト おぼけの話はもうやめましょう。

アゲハ  
カブト

何よ、カブト、怖いのか？  
別に。幽霊なんて、出るかもしれない、出たらどうしようって思うから出るんだ。錯覚なんだよ。

ヤンマ  
アゲハ

それじゃ、あの写真はどうなるわけ？  
写真て？

カブト

（ヤンマに）バカ！ アゲハの前で言うなって言ったのに。

アゲハ

何よ、私に隠し事？ 二人だけの秘密で、私は仲間外れ？

カブト

別に秘密じゃないけどさ、アゲハに言うのと、話が変に盛り上がっちゃうから。

アゲハ

私、帰る。二学期に教室で会っても、話しかけないでよね。

カブト

わかったわかった。ちゃんと話すから、怒るなよ。ただし、絶対に誰にも言

アゲハ

わないこと。

ミドリ先生

約束する。

ナナコ

（カブトに）先生も約束する。

カブト

（カブトに）私も。

アゲハ

昨日、プールで掃除をしてる時、写真を撮ったよな？ あれから、家に帰って、現像したんだけど、何だかおかしいんだ。

カブト

おかしいって？

アゲハ

何にも写ってないんだよ。私もヤンマもアゲハも、それにあのウラシマって人も。

ミドリ先生

カメラのキャップがつけっぱなしだったんでしょ？

カブト

そんな素人みたいな失敗はしません。見てください。（写真を差し出して）

ミドリ先生

これは、私がウラシマさんを撮ったやつなんですけど。

ミドリ先生

プールと空と、あの木だけ。

ヤンマ  
ウラシマさんだけ写ってないんです。

ミドリ先生  
ウラシマさんて、誰？

ヤンマ  
昨日、プール掃除をしてたら、いきなり現れて。本人は、プロのカメラマン  
だつて言つてたけど。

アゲハ  
こっちの写真是？

カブト  
ウラシマさんが撮つたやつ。こっちはもっとおかしいんだ。

アゲハ  
私たちが写つてない。プロだなんて威張つておいて、全部失敗してるじゃない。

ヤンマ  
それより、もっと重大なことに気がつかない？

アゲハ  
プールが写つてない！

カブト  
校庭と校舎と、あの木だけ。プールで撮つたのに、プールが写ってないんだ。  
でも、これ、確かに、うちの学校よ。

ミドリ先生  
先生、うちの学校のプールは、何年前にできたんですか？

ヤンマ  
わりと新しいのよ。まだ十年ぐらいしか経ってないんじゃないかな。

アゲハ  
ということは、この写真に写ってるのは、十年以上前の景色？

クサナギが机を叩く。

クサナギ  
こら、アゲハ！ 調子に乗つて、デタラメを書くんじゃない！

アゲハ  
そう言うだろうと思つて、問題の写真を同封しました。見てください。

クサナギ  
(封筒から写真を出して) 本当だ。

アゲハ  
(ミドリ先生に) ということは、十年以上前の景色を写せるウラシマさんは、  
ヤンマ  
十年以上前の人間なのよ。

アゲハ  
クサナギ  
アゲハ  
クサナギ  
アゲハ  
クサナギ  
ミドリ先生  
カブト  
ナナコ  
アゲハ  
ナナコ  
ミドリ先生  
ヤンマ  
ミドリ先生  
アゲハ  
ヤンマ

だから、カブトの写真には写ってないんだ。  
つまり、ウラシマさんは、現実には存在しない人間なんだな。

（ミドリ先生に）とういことは。

幽霊？  
キヤーツ！

（アゲハに）それは私も考えた。でもさ、ウラシマさんには足もあつたし、

幽霊にしちややけにのんきだったし、第一、昼間からのこのこ現れるかね？  
幽霊は夜しか現れないなんて、ただの迷信よ。

でも、幽霊は星と同じで、太陽の光の下では見えないんじゃないの？

それが迷信だって言うの。太陽だって星の一種じゃない。問題は、その星が  
近くにあるか遠くにあるかってことなの。幽霊だって、近くにいたら、昼間

でも見えるのよ。

校長先生にも見えたそうよ。

昼間に見たんですか？

昨日、校長室で仕事をしてて、お昼にお寿司を取ったんだって。で、食べる  
前にトイレで手を洗って、戻ってきたら、ウニがなくなつたの。「アオタ

のやつ、またやりやがったな」と思つて、隣の職員室へ行ったんだけど、誰  
もいなかった。諦めて、校長室に戻ると、今度はトロもイクラも甘エビもな

い。残つてたのは、ガリだけ。もう完全に頭に來ちゃつて、「アオタ！」つ  
て怒鳴りながら、廊下に飛び出した。すると、十人ぐらい白い人影が、廊下

の向こうへ走っていきながら、「ごちそうさま」つて。

やっぱり、この学校は幽霊の名所なんだ。  
でもさ、いくら名所だって、ちよつと数が多すぎない？

ナナコ　しょうがないのよ、駅だから。

ヤンマ　駅？

ナナコ　死んだ人はここに集まって、みんなと一緒に天国へ行くの。

カブト　まさか、ここから銀河鉄道に乗って、天国へ行くっていうんじゃないよね？

ナナコ　それじゃ、まるで童話よね？　でも、それが事実なの。

アゲハ　嘘だ。丹波哲郎の話と違う。

ナナコ　あの人はまだ死んでないから、知らないのよ。

アゲハ　じゃ、どうしてあんたは知ってるのよ。

ナナコ　私は、この本を読んだから。(と本を差し出す)

アゲハ　(受け取って)　これに、銀河鉄道のことを書いてあるの？

ミドリ先生　(受け取って)　聞いたことのない題名ね。こんなの、うちの図書室にあったかしら。

そこへ、アオタ先生がやってくる。

アオタ先生　ヤマダ、ミドリ先生にまで、ご迷惑をかけてないだろうな？

ヤンマ　まじめに仕事しますよ。

アオタ先生　本当ですか、ミドリ先生？

ミドリ先生　ええ。

ヤンマ　ミドリ先生の言うことは信じて、私の言うことは信じないんだから。

アオタ先生　おまえがそんなことを言える立場か？　プールの水を二度も抜いておいて。

ヤンマ　今日は覚悟して、家に帰るんだな。

ヤンマ　まさか、家に電話したの？

アオタ先生 俺が言っても反省しないんだ。お母さんに言ってもらえないだろう。  
アゲハ ひどい。お母さんは関係ないでしょう？  
アオタ先生 生徒の転落を食い止めるには、学校と家庭ががちりスクラムを組むことが  
大切なんだ。そうですよね、ミドリ先生？  
アゲハ 転落なんかしてないじゃない。  
アオタ先生 自覚のないところがますます心配だ。おまえの家にも電話しておいてよかつた。  
アゲハ 私の家にもしたの？  
カブト (アオタ先生に) それじゃ、私の家にも？ あーあ、帰ったら、またゲンコ  
ツだ。  
アオタ先生 すばらしい。今時、子供を殴る親なんて、なかなかいないぞ。それだけ、お  
まえはお母さんに愛されてるんだ。そうですね、ミドリ先生？  
ミドリ先生 ええ。  
アオタ先生 お仕事の方はまだしばらくかかりそうですか？ 僕はそろそろ帰ろうかと思  
ってるんですが。  
ミドリ先生 まだしばらくかかりそうです。  
アオタ先生 もっと生徒をよこしましょうか？ パツパと片づけて、ビールでも飲みに行  
きましょう。  
ミドリ先生 いいえ、四人も手伝ってくれて、大助かりです。これ以上、人手が増えても。  
アオタ先生 四人？ 僕がよこしたのは、三人だけです。  
ミドリ先生 でも、ヤマダさんと、オオシマさんと、ムロマチさんと。

五人がナナコを見る。

クサナギ

誰だ、その女は！

ミドリ先生

(ナナコに) そう言えば、あなたはどちらの方でしたっけ？

ヤンマ

先生の知り合いじゃないの？

ミドリ先生

(ナナコに) お会いするのは初めてですよ？

ナナコ

ええ。

クサナギ

アゲハ、もしかしたら、そいつは、君が前から会いたがってた――

ナナコ

(ミドリ先生に) この学校の卒業生です。図書室が懐かしくて、フラッと覗

いてみたら、皆さんが忙しそうにしてたんで、何か手伝うことはないかなと思

ミドリ先生

な。なんだ、卒業生ですか。それならそうと行ってくださいよ。

アゲハ

知らない間に仲間に入ってたから、座敷童子かと思っちゃった。

カブト

アゲハ！

ミドリ先生

怖がることないでしょう、ムロマチさん。こんなに明るい幽霊がいるわけな

ナナコ

いじゃない。

ミドリ先生

ムロマチ？(カブトに) あなた、ムロマチって名前なの？

ナナコ

そうですよ。それがどうかしましたか？

ううん、別に。

そこへ、ウラシマがやってくる。

ウラシマ

ナナコ君、こんな所で何をしてるのかな？

ナナコ

ミドリ先生のお手伝い。ほら、私って、困ってる人を見ると、放っておけな

ウラシマ  
ふーん。で、僕とした約束は？

ナナコ  
約束って？

ウラシマ  
とぼけるなよ。昨日、おまえはなんて言った？「明日、必ず一緒に行く」つ

ミドリ先生  
て言っただろう？ ほら、来いよ。

カブト  
あの、あなたも卒業生ですか？

ミドリ先生  
違いますよ。この人が、さつき話したウラシマさん。

アオタ先生  
キヤーツ！ でも、そんなふうには見えないわね。

（ウラシマに）君君、用もないのに、学校の中をブラブラされちゃ困るんだよ。

ウラシマ  
いや、僕は彼女を探しに来ただけで。あれ？

ナナコ  
（黙って、逃げようとしている）

ウラシマ  
ナナコ君、どこへ行くのかな？

ナナコ  
家に帰る。一応、お父さんとお母さんに挨拶してこないと。

ウラシマ  
おかしいな。家には昨日帰ったって言ってなかったっけ？

ナナコ  
昨日は窓から覗くだけで、中に入らなかつたの。だって、お父さんの頭を見て、ビククリしたんだもん。すっかりハゲちやつてて。

ウラシマ  
仕方ないだろう。あれから、十五年も経ったんだから。

ナナコ  
だから、今日は勇気を出して、声をかけてみる。「お父さん、その髪形、素

敵よ」って。

ウラシマ  
その前に、約束を守れよ。ナナコ！

ナナコが走り去る。後を追って、ウラシマが走り去る。

カブト

今、十五年って言ったよな？

ヤンマ

ということは、ウラシマさんは十五年前に死んだの？

アゲハ

ウラシマさんだけじゃない。今の、ナナコって人もよ。

アオタ先生

ミドリ先生、こいつら、一体何の話をしてるんです。

ミドリ先生

オオシマさん、もしかして、今のナナコって人も。

アゲハ

そうです。幽霊だったんです。

カブト・ヤンマ・アゲハ・ミドリ先生・アオタ先生が去る。

クサナギ

こら、アゲハ。君は幽霊に会いたかったから、そう思うんだよ。ウラシマさんは超能力者だったんだ。だから、あの写真は、念写で写したんだ。それから、ナナコは子供の頃に、UFOに連れ去られたんだ。それで、十五年ぶりに帰ってきたんだ。ほら、見ろ。全く別の説明だってできるだろう？ 十五年ぶりが幽霊だって説明するより、よっぽど説得力がないじゃないか。あーっ！ やっぱり、幽霊は存在するんだ！

クサナギが走り去る。

ナナコがやってくる。木の陰に隠れる。ウラシマがやってくる。周囲を見回し、去る。  
 ナナコが木の陰から出る。笑う。と、ウラシマが戻ってくる。

ウラシマ ナナコ君、今まで、どこに行ってたのかな？

ナナコ 言ったでしょう？ 自分の家。

ウラシマ お父さんに挨拶はできたのか？

ナナコ そうしようとは思ったんだけど、やっぱり、声をかけられなかった。

ウラシマ どうして？

ナナコ だって、いきなり娘の幽霊が出てきたら、心臓麻痺を起こすかもしれないし。

ウラシマ しかも、死んでから、十五年も経ってるしな。

ナナコ みんな、変わっちゃってるのよね。私のことなんか、覚えてないみたい。

ウラシマ 浦島太郎の気分だろう？ でも、僕らは覚えてる。

ナナコ 私たちにとっては、たったの十五日前なのに。でも、どうして？

そこへ、駅長がやってくる。

駅長 ナナコ  
 列車に乗る前に、説明を受けたでしょう？  
 ナナコ あの、あなたは？

駅長

ウラシマ

駅長

ウラシマ

ナナコ

ウラシマ

ナナコ

ウラシマ

ナナコ

ウラシマ

ウラシマ

ウラシマ

駅長

ウラシマ

ナナコ

ウラシマ

ウラシマ

ナナコ

ウラシマ

ウラシマ

この駅の駅長です。天上と地上では、時間の流れが全く違う。この話は、出発する前に、天上駅の駅長が説明したはずですが。

それがその、僕らは窓から乗り込んだんで。

まさか、切符を持たないで？

どうしても帰りたかつたんです。帰って、話をしたい人がいたから。

私は、話をしてしても無駄だと思ふな。会いに行っても、怖がられるだけよ。

そのことについては、ちゃんと考えてある。なるべく爽やかな顔をして、何

気なく話しかけるのさ。「やあ、久しぶり」。

何を言っても、聞いてもらえないんじゃないかな。アカネさん、きっと怒つ

てるだろうし。

当たり前だろう？ 自分の亭主が、知らない女と二人で死んだんだ。

普通の人なら、浮気してたつて思うでしょうね。

でも、それは誤解じゃないか。たとえ許してもらえなくても、話だけはしな

くちや。

だったら、急いだ方がいい。帰りの列車は、明日の夜に出発します。その列

車に乗り遅れると、二度と天上には戻れませんよ。

ナナコ、頼む。

私は行かない方がいいと思う。あんたはアカネさんにとって、一番会いたく

ない人なのよ。

それは違うな。僕は二番で、一番はナナコだろう。

だから、逃げるのよ。

ナナコ！

ナナコ・ウラシマが走り去る。反対側へ、駅長が去る。カニタニ・サルサワ・ウスイケがやってくる。後を追って、モモヤマがやってくる。

モモヤマ 違うよ違うよ。僕は幽霊じゃないよ。

カニタニ 幽霊じゃなかったら、何よ。

モモヤマ 僕はモモヤマと言いました、この近くに住んでる――

サルサワ 変質者？

モモヤマ 違うよ違うよ。このカメラを見てくれよ。

ウスイケ カメラ？

モモヤマ (フラッシュをたいて) 昨夜もここで会ったろう？ 君たちに追いかけて

カニタニ て、今みたいに。

モモヤマ それじゃ、昨日のピカリはあんた？

カニタニ 僕はプロのカメラマンなんだ。君たちと同じで、幽霊を追いかけてる。

カニタニ 私たちは幽霊なんか追いかけてません。なるべくなら、一生会わずに済ませ

モモヤマ と思うてるんです。

カニタニ それなら、どうしてこんな時間に学校にいるんだ。

モモヤマ もう帰るところなんです。どいてください。

ウスイケ その前に、一つだけ質問させてくれ。女の子に会わなかったか？

モモヤマ 女の子って？

サルサワ 歳はたぶん、二十五、六。白いコートを着て、白いパンプスをはいている。

モモヤマ (カニタニに) 昨夜の人じゃないの？

サルサワ 知ってるんだね？

サルサワ 昨夜、あなたに襲われた後、帰ろうと思って、校門まで来たたら、突然話しか

モモヤマ  
カニタニ  
けられたのよ。  
やっぱり、校門か。  
初めて会うのに、やけに馴れ馴れしくてさ。(腕時計を示して) この時計を  
くれたのよね。

ウスイケ  
あの人は「預かってくれ」って言ったのよ。

カニタニ  
私はコインロッカーじゃないのよ。一日取りに来なかったら、もう私の物よ。

モモヤマ  
その時計、ちよつと見せてくれないか？(カニタニの手をつかむ)

カニタニ  
(モモヤマの頬を叩いて) 触らないで！

サルサワ  
この人、やっぱり、変質者よ！  
違うよ違うよ。僕はだね——

カニタニ・サルサワ・ウスイケ・モモヤマが去る。ナナコがやってくる。後を追って、  
アヅチがやってくる。

アヅチ  
動くな！ 動くと、脱ぐぞ！

ナナコ  
脱ぐ？ 今、「脱ぐ」って言ったの？

アヅチ  
俺はけつして変質者じゃない。しかし、真実を捕まえるためなら、何でもする。俺に脱いでほしくなかったら、質問に答えろ。

そこへ、ムロマチがやってくる。

ムロマチ  
アヅチ君、はしたない真似はやめなさい。  
ナナコ  
あなた、もしかして。

ムロマチ こいつは私のアシスタントなんだ。無礼な真似をして、済まなかった。  
ナナコ (顔を背けて) 私、これから行く所があるんです。失礼します。  
ムロマチ その前に、少し話を聞かせれくないか。  
ナナコ (顔を背けて) インタビューなら、マネージャーを通してくれない？  
ムロマチ 幽霊のくせに、態度がでない。死んでも死に切れなかった人間が、生きて  
る人間に偉そうな口をきくな。  
ナナコ (顔を背けて) 私はちゃんと死にました。天国にも行ってきました。  
ムロマチ それなら、どうしてここにいる。  
ナナコ (顔を背けて) 戻ってきたのよ、用事があつて。私はどうでもよかったんだ  
けど、ムロマチ君があつ！(口を押さえる)  
ムロマチ 今、何て言った。ムロマチって言ったのか？  
ナナコ (顔を背けて) それじゃ、続きはまた明日。

ナナコが走り出す。行く手に、モモヤマが立ち塞がる。

モモヤマ ほら、やっぱり幽霊は存在するでしょう？  
ムロマチ (ナナコに) おまえ、私を知ってるな？  
モモヤマ え？先生の知り合いだったんですか？  
ムロマチ (ナナコに) 私もおまえを知ってる。前にどこかで会ったことがある。  
ナナコ あら、私は初めてよ。  
ムロマチ 確かに会った。十年か二十年前に。

そこへ、ウラシマがやってくる。

ウラシマ

十五年前だよ。僕と一緒に死んだんだ。

ナナコ

バカ！ そうやって、突然現れたら、驚くでしょう？

ウラシマ

そうか。（咳払いをして、ムロマチに）やあ、久しぶり。

ナナコ

ダメよ。やっぱり、驚いてる。

ムロマチ

行くぞ、アヅチ、モモヤマ。

ウラシマ

アカネ！ 一分だけでいいんだ。僕の話聞いてくれないか。

ムロマチ

あなたのことは忘れたんだ。

ナナコ

ほら、やっぱり、聞く耳を持たないじゃない。

ナナコが走り去る。

ウラシマ

待てよ、ナナコ！（ムロマチに）必ずもう一度、会いに来るから。

ウラシマが走り去る。

モモヤマ

先生の知り合いだったんですね？

ムロマチ

亭主だよ。

アヅチ

亭主っていうと、旦那様？

ムロマチ

一緒になって、一年もしないうちに死んじゃった。十五年前の冬の夜。

ムロマチ・アヅチ・モモヤマが去る。

クサナギがやってくる。椅子に座って、手紙を読む。

クサナギ 「図書室の整理はなかなか終わりませんでした。古い本を何百冊も運ばされて、腰は痛むし、手は疲れるし。時計が六時を回ったところで、ようやくミドリ先生が言いました。『続きは明日にしましょう。明日も手伝ってくださいわよね?』。手伝うわけねえだろう、バーカ」

アゲハがやってくる。反対側から、アゲハの母がやってくる。

アゲハ ただいま。

アゲハの母 お帰りなさい、アゲハちゃん。お部屋に行く前に、こっちに来なさい。

アゲハ お説教なら、後にして。私、おながが空いちやった。

アゲハの母 いいから、そこに座りなさい。

アゲハ ハイハイ。でも、これだけは先に言わせて。アオタ先生がなんて言ったか知らないけど、私は何もしてないの。

アゲハの母 何もしてなかったら、先生がお電話をくださるわけないでしょう?

アゲハ オーパーなのよ、あいつ。

アゲハの母 あいつとはなんですか、先生に向かって。

アゲハの母  
アゲハの母  
アゲハの母  
アゲハの母  
アゲハの母

だって、私のこと、転落しかかかってるって言うんだもん。  
アゲハちゃん、学校でサングラスをかけてるんだって？  
あれは、太陽が眩しすぎるから。  
出しなさい。  
出したら、返してくれないでしょう？  
勉強には必要ないものでしょう？ いいから、出しなさい。出しなさいってば！

ヤンマがやってくる。反対側から、ヤンマの母がやってくる。

ヤンマの母  
ヤンマの母

ただいま。  
あ、お帰り、ミュキ。ちよっとこっちへ来てごらん。  
何よ。  
いいからいいから。そこに座って、母ちゃんの目を見てごらん。  
にらめっこでもしようって言うの？  
お、軽くなわしたね。かわすってことは、何か疚しいことがあるね。  
別に何も疚しいことなんかないよ。  
瞬きが多いね。  
母ちゃんだって、瞬きするでしょう？  
やけに突っかかるね。やつぱり、疚しいことがあるね。  
何もないよ。プールの水は抜いたけど、別に疚しいとは思ってないもん。  
プールの水を抜くのはいいことかい、悪いことかい。  
悪いことだよ。

ヤンマの母 他人様にも迷惑がかかるし、水だってもったいないよね？ どう考えたって、悪いことだよ。悪いことをしておいて、どうして疚しくないんだい。

ヤンマ だって、ちゃんと罰を受けたし。

ヤンマの母 罰さえ受ければ、何をやってもいいって言うのかい？

カブトがやってくる。

カブト ただいま。

クサナギ お帰り。

カブト やっぱり、誰もいない。

カブトが腰を下ろして、テレビを点ける。

アゲハの母 (アゲハに) どうしても出さないんなら、ママもあなたに夕食を出しませんからね。

ヤンマの母 (ヤンマに) 悪いことをしたら、反省しなくやダメだよ。反省しない子には、夕御飯を食べさせないからね。

ヤンマ 反省はしてるよ。

アゲハ (アゲハの母に) 反省してるから、夕御飯を食べさせてよ。

アゲハの母 だったら、サングラスを出しなさい。

ヤンマの母 (ヤンマに) サングラスまで、勝手に持ち出したりして。父ちゃん、怒ってたよ。

ヤンマ 取ったんじゃないよ。借りたんだよ。(サングラスを差し出す)

アゲハ

(アゲハの母に) 私のお金で買ったんだからね。学校には持っていかないから、後で返してよね。(サングラスを差し出す)

アゲハの母

(受け取って) こういうものをかけたがるのは、心が乱れてる証拠よ。

ヤンマの母

(受け取って、ヤンマに) こういうものは似合う人がかけなくちゃ。父ちゃんにもあんまり似合わないから、母ちゃんが使うからね。

ヤンマ

鏡を見てよ。

アゲハ

(アゲハの母に) ほら、見てよ。私のどこが乱れてるって言うの？

ヤンマの母

(ヤンマに) やっぱり、似合ってるじゃないか。

アゲハの母

(アゲハに) ママの目はごまかせません。あなた、最近、帰りが遅いでしょ。どこに行ってるの？

ヤンマの母

(ヤンマに) 夜中に外を出歩くのも、感心しないね。子供は九時に寝るって、昔から決まってるんだ。

アゲハの母

(アゲハに) お友達の家だなんて、嘘でしょう？ デイスコとか、いかがわしい場所に行ってるんじゃないの？

アゲハ

行ってないよ。本当は、お寺巡りをしてるの。幽霊に会うために。

アゲハの母

幽霊に？ あなた、幽霊が怖くないの？

ヤンマ

怖くないよ。

ヤンマの母

(ヤンマの母に) 私は幽霊より、水の方が怖いよ。

アゲハの母

そんなの、最初のうちだけだよ。慣れれば、大好きになるさ。

ヤンマの母

(アゲハに) 明日から、お寺巡りは禁止よ。それから、水泳の補習に行くのも禁止。

ヤンマ

(ヤンマに) 泳げるようになったら、父ちゃんと三人で海に行こう。海で泳ぐと、気持ちいいよ。

アゲハの母  
（アゲハに）あなたは泳げるんだから、補習に行く必要はないでしょう？  
（ヤンマに）海には他にも楽しいことがある。ボーイフレンドが作れるんだ。

ヤンマの母  
母ちゃんだって、海で父ちゃんを捕まえたんだよ。このナイスバディで。

アゲハ  
私は図書館で捕まえるから、いい。  
（アゲハの母に）私は、ヤンマに泳げるようになってほしいの。だから、一緒に付き合ってるんじゃない。

アゲハの母  
ヤマダさんはヤマダさん。あなたはあなたでしょう？  
（ヤンマに）そりゃ、おまえにはおまえの考えがあるだろうけどさ。「泳ぐのはイヤだ。だから、プールの水を抜く」っていうのは、間違いだろうか？

ヤンマ  
でも——  
ヤンマの母  
アゲハの母  
話はこれでおしまい。自分の部屋へ行きなさい。

ヤンマ・アゲハ  
夕御飯は？

アゲハの母  
ダイエツトしたかつたんじやないの？  
ヤンマの母  
（ヤンマに）今夜は寿司でも取ろうかね。

アゲハの母・ヤンマの母が去る。後を追って、ヤンマも去る。

クサナギ  
「こうして、私のダイエツトは着々と進んでいます」

アゲハ  
三枚のはずが、大分オーバーしてしまいました。国語の先生には、大河ドラマのように読みごたえがあったと伝えておいてください。

クサナギ  
また途中でおしまいかな？  
アゲハ  
途中じゃないでしょう？ ちゃんと一日の出来事、全部書いたじゃない。

クサナギ  
次はカブトの番だな。あいつにも、手紙を書くように言ってくれよ。

アゲハ

カブトは、国語が大の苦手だったでしょう？ 一応言っておくけど、あんまり期待しないでください。

クサナギ

それなら、アゲハが書いてくれよ。この勢いで、明日もサラサラッと。これで、国語の宿題はおしまい。次は数学の問題集だ。

アゲハ

手紙ぐらい、一時間もあれば書けるだろう？

クサナギ

八月十五日、オオシマアゲハ。そう言えば、ナナコが読んでた、死後の世界の本。あの本はどうした？

アゲハ

追伸、ナナコの本は、私も気になってたんです。明日、学校に行つて、読んでみようつと。

クサナギ

題名はなんていうんだ。

アゲハ

『ナツヤスミ語辞典』

クサナギ

よし、明日、ブック・オフで探してみよう。

ムロマチ

アゲハが去る。ムロマチがやってくる。

カブト

ただいま。

ムロマチ

お帰り。今日の夕飯は、母さんの番だからね。

カブト

わかってるよ。それより、カズコ。あんたの学校、幽霊が出るんだって？

ムロマチ

どうして知ってるの？

カブト

近所で評判になつてるのよ。

ムロマチ

私、会ったよ。

カブト

いつ。

ムロマチ

昨日も今日も。男の幽霊と女の幽霊。

ムロマチ  
カブト  
ムロマチ

話しました？

少しね。

男の人はプロのカメラマンなんだって。今から十五年前に死んだみたい。そ

の人が写真を撮ると、十五年前の景色しか写らないんだ。

カメラを持ってたの、その幽霊。

そうじゃなくて。

私のカメラを持ち出して、幽霊に貸したな？

ごめん。

私のカメラを使うのはいいけど、他の人に貸すのはやめてよね。

もう貸さない。約束する。

それからさ、あんた、幽霊は怖くないみたいだけど、あんまり仲良くならな

い方がいいんじゃない？

仲良くなんか、なっていないよ。

それなら、いいけど。

このカメラ、私にしてくれない？

いいよ。

本当？ これ、一番古いカメラで、一番大切にしてたんじゃないの？

別に。最近、あんまり使ってないし。

私、アルバムを作ろうと思うんだ。自分のアルバム。

私、アルバム嫌いなもの、知ってるでしょう？ 写真っていうのはね——

過去を懐かしむために撮るんじゃない。真実を捕まえるために撮るんだ。

わかってるなら、どうして。

カブト  
ムロマチ

真実って、大切なものでしょう？ 私は私の真実を大切にしたいの。  
真実っていうのは、そんなに簡単に捕まらないのよ。あんたの腕じゃ、まだ  
まだね。

カブト・ムロマチが去る。



クサナギ

あつ！ 貴様、騙したな？

郵便屋が逃げる。クサナギが後を追う。

郵便屋

ひいきされた生徒さんにかわって、天誅を下したんですよ。

クサナギ

こら、待て！ 待たないと、郵政大臣に言いつけるぞ！

郵便屋

あつ！

クサナギ

何だよ。

郵便屋

あなた、松葉杖は？

クサナギ

あつ！ 治ってたのか。

郵便屋

ごまかしてもダメです。あなた、僕を三日間も騙してましたね？

クサナギ

そんなの、お互い様だろう？

郵便屋

先に騙したのは、あなたの方ですよ。どうして治ってないフリをしたんです。

クサナギ

だって、怪我もしてないのに、家でブラブラしてたら、失業者みたいじゃないか。

郵便屋

それじゃ、あなた、最初から怪我なんかしてなかったんですか？

クサナギ

怪我はしたよ。刑事ドラマの犯人役で、東京駅のロケ。あの仕事がよく行

郵便屋

ってれば、小さな役だけど、レギュラーがもらえるはずだったんだ。それな

クサナギ

のに、怪我のおかげで、すべてがパー。それ以来、誰からも呼びがかから

郵便屋

ない。僕みたいなオッチョコチョイは、信用できないんだってさ。

クサナギ

それで、採用通知を待ち焦がれてたんですか。

これが最後に残された、たった一つの仕事なんだ。これがダメなら、僕の人

生はおしまいなんだ。

郵便屋  
クサナギ  
しかし、これは採用通知じゃないようですね。（封筒を差し出す）  
（受け取って）ムロマチカズコ？ やっぱり、カブトか。

郵便屋  
クサナギ  
あなたは生徒さんに人気があるんですね。しかも、女の生徒さんに。  
こいつらに好かれても、あんまりうれしくないけどね。

郵便屋  
クサナギ  
あなたみたいないい加減な人がどうして。  
そうなんだよな。僕なんか、ちっともいい先生じゃなかったし、いい先生に  
なろうって気もなかったのに。

郵便屋  
クサナギ  
それなら、どうして先生になったんですか？  
夏休みがあるからさ。

クサナギが手紙を開く。別の場所に、カブトが現れる。

カブト  
どうして夏休みには終わりがあるんだろう。このまま夏休みが終わらなければ、どんなに素敵だろう。八月三十一日が来るたびに、私は悔しくてたまりません。

クサナギ  
日本には四季がある。夏の陽差しも気持ちいいけど、秋の風だって捨てたもんじゃないよ。

カブト  
クサナギ  
私には、季節は二つしかありません。夏と、夏を待つ間。  
待ってることが大切なんだな。夏休みが終わらなかつたら、夏休みのすばらしさを忘れてしまう。

カブト  
クサナギ  
そうかな。  
桜の花は散るからこそ美しい。  
散らない桜がないから、そう思うんだ。一年中咲いてたら、一年中お花見が

クサナギ  
カブト  
クサナギ  
カブト  
クサナギ  
カブト  
クサナギ  
カブト  
クサナギ  
郵便屋  
クサナギ  
郵便屋  
クサナギ  
郵便屋  
クサナギ  
郵便屋  
クサナギ  
郵便屋  
クサナギ

できるんだよ。  
いいねえ。一年中、酒が飲める。  
夏休みだって、同じさ。実際に終わらない夏休みを過ごしてみなくちゃ、いか悪いか、わからない。  
僕にはわかる。終わらないっていうのは、恐ろしいものなんだ。時間の流れは冷たい。人間なんかお構いなしに流れていく。時々、自分で止まらなくちゃ、頭がおかしくなっちゃう。  
夏休みが嫌いなんだな？  
そんなこと言っていないだろう？  
好きなら、終わってほしくないはずだ。  
今は好きでも、いつかは嫌いになるかもしれない。好きなまままでいたかったら、嫌いになる前に、自分の手で終わらせるしかないんだ。  
自分の手で？  
それはけっして、恥ずかしいことじゃない。  
クサナギさん、郵便です。  
あれ？ もう一通あったの？  
あなたがずっと待ってた手紙です。（封筒を差し出す）  
（受け取って）まさか、採用通知なのか？  
でも、その封筒は、学校のもですね。  
（手紙を開いて）合格だ！ 九月一日から、学校に来てさ。  
また先生になるんですか。  
三年前と同じ、産休代用教師だけだね。新しいカブトたちが、僕のことを待ってるんだ。

郵便屋

あなたの夏休みも、これで終わりですね。

郵便屋が自転車に乗って、去る。

カブト

暑中お見舞い申し上げます。最初に言っておきますが、私はクサナギ先生が嫌いです。アゲハは「先生らしくなくていい」って言ってたけど、先生っていうのは勉強を教えるのが仕事でしょう？ 私には、クサナギ先生に何かを教わったって記憶が全くありません。

クサナギ  
カブト

僕にも、何かを教えたって記憶は全くありません。でも、一つだけ忘れられないことがあります。図画工作の授業で、校庭の景色を描いた時、私は桜の木を緑色に塗った。その時、季節は冬で、枝には葉が一つもなかったのに。ヤンマもアゲハも笑ったけど、先生だけは笑わなかった。「カブトには、僕らに見えないものが見えたんだ」って。

クサナギ  
カブト

その記憶も全くない。だから、この手紙を先生に送ろうと思ったんです。同封した写真を見てください。

クサナギ  
カブト

誰だい、この人？  
先生なら、その写真の意味がわかるんじゃないかと思って。

クサナギ  
カブト

写真のことなら、お母さんに聞けばいいだろう。  
私が知りたいのは、その人が誰かということですよ。その人と会ったのは、うちの学校のプールでした。そして、その人と別れたのは――

ヤンマが飛び出す。後を追って、アオタ先生・カニタニ・サルサワ・ウスイケが飛び出す。

アオタ先生  
カニタニ

ヤマダ、先生は怒ったぞ。今日という今日は怒ったぞ。

ヤマダさん、あなたがプールの水を抜くのは、補習を中止にするためじゃなく、先生を殺すためだったのね？

サルサワ

（ヤンマに）今日なんか、空中回転をして、飛び込んだのよ。生きてる方が不思議なくらいよ。

カブト

死ぬ前に、ミイラ男になりそうだな。

カニタニ

ヤマダさん、あなた、いつ学校に来たの？

ヤンマ

今朝四時に起きて。「早起きは三文の得」って言うでしょう？

アオタ先生

早起きを悪用するヤツがあるか！

ウスイケ

（ヤンマに）気が付かなかつた。朝来れば、幽霊に会わずに済むんだ。

カブト

そんなことないよ。この学校の幽霊は、夜も昼もお構いなしに出るんだから。

カニタニ

そうなのか？

アオタ先生

先生なんか、昨日、二人も見ただぞ。話までしちゃったんだ。

カニタニ

先生、私、おなかが痛い。早退します。

ヤンマ

諦めた方がいいんじゃない？ この学校は、幽霊が集まる駅なんだから。私たちに何かしようっていうんじゃないんだから、仲良くするしかないのよ。

カニタニ

どうして幽霊と仲良くしなくちゃいけないのよ。

ウスイケ

（ヤンマに）「友達を選びなさい」って、ママに言われた。

ヤンマ

それは、私からも言いたい。友達を選びなさい。

カニタニ

あんたに言われる筋合いはないわよ。私だって、ムロマチさんに同じことを言

アオタ先生

いたいのには、グツとこらえてるのよ。

おまえたち、友情を壊し合うんじゃない。

ヤンマ  
カニタニ  
決まってるじゃない。トイレ掃除よ。

サルサワ  
今日はオオシマさんがいないから、時間がかかるわね。

カニタニ  
オオシマさんには冬休みにやってもらうからいいわ。

アオタ先生  
カニタニ、冬休みの計画まで立てるな。(ヤンマに) トイレ掃除はまた後でいい。ここでしばらく待ってるんだ。

カニタニ  
さては、もっと重い罰ですか？

サルサワ  
先生方を集めて、臨時の職員会議？

ウスイケ  
始末書？ 停学？ まさか、退学？

カブト  
義務教育に退学があるか？

カニタニ  
(アオタ先生に) それなら、せめて停学ですよ？ でも、夏休みに停学なんて、意味がない。

アオタ先生  
お母さんに来てもらうんだ。俺が言ってもダメ、お母さんが言ってもダメなら、PTAでスクラムを組むしかない。

カニタニ  
なるほどね。

カブト  
(アオタ先生に) うちの母親は呼ばないですよ？

アオタ先生  
ムロマチ、おまえのお母さんは重要な戦力になるんだ。

ウスイケ  
ミドリ先生はどうでしょう？

アオタ先生  
そうだな。おまえたちの担任なんだから、一応呼んだ方がいいだろうな。

アオタ先生が去る。

ウスイケ  
いつもと違う。

サルサワ  
カニタニ

昨日の帰り、ミドリ先生に言われたらしいわ。「迷惑です」って。いつもより凶暴になってるから、気を付けた方がいいわね。

カニタニ・サルサワ・ウスイケが去る。

クサナギ

「アオタ先生なんて、別に怖くありません。それより、問題はうちの母さんです。写真の世界は、男の社会。若い頃は、先輩のカメラマンに、何度も叩かれたそうです。だから、母さんもすぐに手が出る。しかも、平手じゃなくて、ゲンコツです。あれで女とは思えません。今日こそはゲンコツだ。そう思っ、落ち込んでいますと」

ナナコがやってくる。

ナナコ

カブト

ナナコ

カブト

ナナコ

カブト

ヤンマ

ナナコ

ヤンマ

ナナコ

ハイ、元気？ 私は死んでるけど、元気。

やめろ。こっちに來るな。

まあまあ、そう言わないで。ちょっと聞きたいことがあるんだけどさ。あな

たちが、カニタニって子、知らない？

知ってるよ。ついさっきまで、ここにいた。

今、どこにいる？

さあね。今日の補習は中止になったから、家に帰ったんじゃないか？

(ナナコ) カニタニさんに何の用？ まさか、とりつこうって言うの？

私がそんなことをする人間に見える？

じゃ、どうしてさっさと成仏しないのよ。

ナナコ  
ヤンマ  
ナナコ  
カブト  
ナナコ  
カブト  
ナナコ  
カブト  
カブト

私はもう成仏したの。一度天国に行って、戻ってきたの。どうしてわざわざ戻ってきたのよ。

人を邪魔者扱いして。いいじゃない。どうせ、今夜、帰るんだから。銀河鉄道が迎えに来るの？

そうよ。出発は、夜中の十二時。

ウラシマさんも帰るの？

ウラシマ？ あ、そうそう。あの人も一緒にね。

あの人、プロのカメラマンなんだろう？

大学時代から、写真が好きでさ。一人で撮影旅行に行ってた。あなたも写真

が好きなの？

好きっていうか、母親がカメラマンだから、自然とね。

あなたの苗字、ムロマチよね？ お母さんの名前は、アカネ？

そうだよ。知ってるの？

昨夜、会ったのよ。

母さん、学校に来たの？ そんなこと、一言も言ってなかったのに。

お父さんは亡くなったんだって？

私が生まれる前にね。私が母さんのおなかにいる時、交通事故で死んだんだ。

再婚はしてないの？

そういうつもりは全然ないみたい。写真だけが生き甲斐って感じ。

カブトのお父さんのことが忘れられないんじゃない？

それはないよ。父さんの話は絶対にしないし。だから、私は顔も知らない。

アルバムがあるでしょう？

母さん、アルバムが嫌いなんだ。「写真はアルバムに貼るために撮るんじゃないや

ナナコ  
カブト

ない」って言うって。  
知りたいとは思わないの？

小学四年の時だったかな。親戚の叔父さんに聞いたんだ。「私の父さんはどんな人だったの？」って。最初は渋ってたけど、しつこく聞いたら、やっと教えてくれた。父さんは、よその女の人と一緒に死んだんだ。

ヤンマ  
カブト

それはつまり、浮気してたってこと？

そうとしか考えられないだろう？ 母さんは父さんが許せないんだ。だから、何も言わないんだ。

ナナコ

でも、せめて顔ぐらいは知りたいでしよう？

カブト

今は別に。母さんは私に教えたくないんだ。だったら、私も知りたくない。

ナナコ

でも——

カブト

私の話はどういだろう？

ヤンマ

ちよつと待って。

ナナコ

何よ。私が撮った写真には、十五年前の景色が写ってた。ということ、私が写真を撮っても、やっぱり十五年前の景色が写るってことよね？

カブト

たぶんね。でも、それがどうかした？

ナナコ

このカメラ、貸して。(カブトの手からカメラを取る)

カブト

ダメダメ。人には貸さないって約束したんだ。

ナナコ

いいじゃない、貸してよ。

カブト

返せよ。こら、ナナコ！

ナナコが走り去る。後を追って、カブトが走り去る。

クサナギ  
ヤンマ  
クサナギ  
ヤンマ  
クサナギ  
ヤンマ

こら、カブト！ 先生が「待ってる」って言ったのを、忘れたのか？  
私も帰っちゃおうかな。  
ダメダメ。悪いことをしたら、男らしく罰を受けなくちゃ。  
私は女の子です。  
それに、逃げたって思われるのはイヤだろう？  
そうだ。私は逃げないって決めたんだ。逃げないぞ。逃げてたまるか。

そこへ、ミドリ先生・アオタ先生・ヤンマの母・アゲハの母・アヅチ・モモヤマがやってくる。

ヤンマの母  
ミドリ先生  
ヤンマの母  
ヤンマ  
ヤンマの母  
アオタ先生  
ヤンマの母  
ミドリ先生  
ヤンマの母

ミユキ！ おまえ、またやったんだって？  
まあまあ、ヤマダさんのお母さん、怒らないで。  
これが怒らずにいられますか。あれほど、他人様に迷惑をかけるんじゃない  
って言ったのに。(ヤンマに) こっちにおいて。  
イヤだ。母ちゃん、ぶつもん。  
ぶたれるようなことをしたのは誰だい！  
まあまあ、ヤマダさんのお母さん、暴力はいけません。  
痛い思いをしなくちゃ、わからないんですよ。甘やかしたら、つけあがるん  
だから。大体、先生方が甘やかすから、三回も同じ悪さを繰り返すんですよ。  
体罰はいけませんわ。中学生にもなったら、話してわからせなくちゃ。  
話してわからないんだから、叩くしかないでしょう？ 全く、先生なんて、  
口だけ達者で、全然頼りにならないんだから。

アオタ先生  
ミドリ先生  
ヤンマの母  
ミドリ先生  
アオタ先生  
アゲハの母  
アオタ先生  
ヤンマ  
アゲハの母  
ヤンマ  
アゲハの母  
ミドリ先生  
モモヤマ  
ミドリ先生  
モモヤマ  
アヅチ  
モモヤマ  
アヅチ  
モモヤマ  
アヅチ

口だけとはなんですか。私は筋肉だって――

まあまあ、アオタ先生。(アオタ先生の腕をつかむ)  
昼間っからイチャイチャして。子供より、恋人の方が大事ってことですか。  
恋人なんかじゃありません！

まあまあ、ミドリ先生。

やっぱり、アゲハは来てないんですか？

ヤマダ、今日はオオシマに会ったか？

会ってない。

私に黙って、家を出ていったのよ。どこに行ったか、知らない？  
知らない。

でも、アゲハは昨日も一昨日も、あなたに付き合って、学校に来たんですよ？  
まさか、途中で誘拐されたんじゃない？

(アヅチ・モモヤマに) あら、あなたは？

僕らはムロマチの母親の代理です。

「お母さんに来てほしい」って言ったはずですけど。

それはちゃんと伝えたんですが、「学校には行きたくない」って。

(モモヤマを叩いて、ミドリ先生に) 「行きたいけど、行けない」って。どうしても今日中にやらなくちゃいけない仕事がありました。

仕事なんかしてなかったじゃないか。

(モモヤマを叩いて、ミドリ先生に) くれぐれもお詫び申し上げるようと

言ばかりました。

おまえ、嘘がうまいなあ。

(モモヤマを叩いて、ミドリ先生に) それで、カズコ君は？

アオタ先生  
ヤンマ  
ミドリ先生  
ヤンマ  
モモヤマ  
アゲハの母  
ヤンマの母  
アゲハの母  
アオタ先生  
ヤンマ  
ヤンマの母  
ミドリ先生  
ヤンマ  
アオタ先生  
ヤンマ  
ミドリ先生  
ヤンマの母  
ヤンマの母  
ヤンマの母  
ヤンマの母

ヤマダ、ムロマチはどうした？  
行っちゃった。  
行っちゃったって、どこへ？  
ナナコがカメラを持って逃げたから、それを追いかけて——  
幽霊？ この学校には幽霊は出るんですか？  
奥さん、知らなかったんですか？ この近所じゃ、有名ですよ。  
まさか、アゲハも一緒にやないでしょうね？ アゲハが幽霊に誘拐されたんだとしたら、私はどこに訴えればいいんですか？  
ヤマダ、おまえはどうして一緒に行かなかったんだ？  
私は悪いことをしたんだから、罰を受けます。  
居直るんじゃないよ、子供のくせに。  
ヤマダさん、先生は罰を受けさせるために、お母さんをお呼びしたんじゃないのよ。あなたに反省してほしいから。  
泳ぎたくないのよ。私は絶対に泳ぎたくないの。  
中学生にもなつて、泳げなくてどうする。  
私は死ぬまで泳げなくていいの。  
逃げちゃダメよ、ヤマダさん。  
私は逃げなかった。  
何言ってるんだい、水を抜いておいて。  
抜いたけど、逃げなかった。  
水からは逃げ回ってるじゃないか。  
母ちゃんにはわからないのよ、水の怖さが。

ヤンマの母

わかりませんね。

私の気持ち、わかんないのよ。

図々しいこと、言うんじゃないよ。

何が図々しいのよ。私は「泳ぎたくない」って言うだけなのよ。どうして認めてくれないの？ 大人になれば、「泳ぎたくない」って言えば、泳がなくて済むでしょう？ どうして大人はよくて、中学生はダメなのよ。

ヤマダさん、私も昔は水泳が苦手だったのよ。確かに今は泳がないけど、中学生の時は、我慢して泳いだわ。

(ヤンマに) 先生も我慢して、掃除したぞ。

(ヤンマに) 私も我慢して、宿題をやったよ。

(ヤンマに) 私も我慢して、給食を食べた。

(ヤンマに) 俺も我慢して、朝練に行った。

(ヤンマに) 僕も我慢して、委員をやった。

(ヤンマに) みんな、我慢してきたのよ。どうしてあなただけ、我慢できないの。

たくさん我慢してるじゃない。授業だって、制服だって、校則だって。どんなにバカらしいと思っても、どんなに苦しいと思っても、私は絶対に逃げなかつた。でも、泳ぐのだけは我慢できないのよ。一つくらい我慢できなくても、仕方ないでしょう？ どうしてわかってくれないの？

クサナギが立ち上がる。

クサナギ

ヤンマ、玉手箱を開けるんだ。

ヤンマ  
クサナギ

玉手箱？  
よく頑張った。先生やお母さんを相手に、一人でよく戦った。でも、もうお  
しまいだ。

ヤンマ

イヤだ。私は最後まで戦う。

クサナギ

今がもう最後なんだ。玉手箱を開けよう。

ヤンマ

玉手箱って、何よ。

クサナギ

夏休みを終わらせるんだ。

ヤンマ

イヤだ！

ヤンマが走り去る。後を追って、ミドリ先生・アオタ先生・ヤンマの母・アゲハの母・  
アヅチ・モモヤマが走り去る。

ナナコがやってくる。後を追って、カブトがやってくる。

カブト

待てよ、ナナコ。どこまで行くんだよ。

ナナコ

私たちが死んだ場所。

カブト

私たちが、ナナコとウラシマさん？

ナナコ

そうよ。私たちは十五年前に、一緒に死んだの。駅前十字路口で。

カブト

もしかして、交通事故？

ナナコ

トラックに撥ね飛ばされて、地面に叩きつけられて。人生まだこれからだったのに。

カブト

でも、事故の現場なんかに行って、何を撮るんだよ。

ナナコ

わからないかな。あの人が撮った写真には、十五年前の景色が写ってた。それはたぶん、あの人の時間が十五年前に止まったからよ。あの人が死んだ瞬間に。

カブト

間によ。そういうことは、私が写真を撮れば、私が死んだ瞬間の景色が写る。

ナナコ

待てよ。そんなことをしたら、あんたの死体が写るじゃないか。

カブト

私じゃなくて、あの人を撮るの。

ナナコ

ウラシマさんだって、死体じゃないか。

カブト

あの人はすぐに死ななかったの。私は即死だったけど、あの人は病院に運ば

ナナコ

れるまで、意識がはつきりしてたんだから。

カブト 瀕死の重傷だったんだろう？ 顔なんか、グチャグチャだったんじゃないか？  
ナナコ それは現像してからのお楽しみ。  
カブト 冗談じゃない。私は、怪談とかホラーとか大嫌いなんだ。どうしてそんな写真を撮らなくちゃいけないんだよ。  
ナナコ クリスマス・プレゼントよ、私からの。  
カブト クリスマス？ 夏なのに？  
ナナコ 私たちが死んだのは、冬だったの。十五年前のクリスマスイブ。

ナナコがカブトにカメラを渡す。そこへ、ウラシマがやってくる。

ウラシマ

悪かったな、急に呼び出して。

ナナコ

あなたって人は、どうしていつもこうなの？

何か困ったことがあるたびに、

ウラシマ

「ナナコ」って。

おまえ以外に頼めるヤツがいからだよ。

ナナコ

結婚して、初めてのクリスマスでしよう？ プレゼントくらい、自分で選びなさいよ。

ウラシマ

苦手なんだよ、そういうの。女が喜びそうなものなんて、わからないし。

ウラシマ

何でもいいのよ。好きな人がくれるものなら、安物だって、趣味が悪くたって、うれしいものなの。

ナナコ

あいつはそういう女じゃない。気に入らないものは、「こんなのいらねえよ」って、はつきり言うんだ。

ウラシマ

そんなことないって。心を込めてプレゼントすれば、きっとわかってくれる。どうせなら、「こいつがほしかったんだよ」って、言わせたいじゃないか。

ナナコ  
ウラシマ  
ナナコ  
ウラシマ  
ナナコ  
ウラシマ  
ナナコ  
ウラシマ  
ナナコ  
ウラシマ  
カブト  
カブト  
ナナコ  
カブト  
カブト  
クサナギ  
ナナコ  
ウラシマ  
ナナコ  
ウラシマ  
ナナコ  
ウラシマ  
ナナコ  
ウラシマ

だから、女の目で選んでほしいんだよ。  
でも、新婚三カ月で、他の女とデートしていいの？

デートなんてしてないじゃないか。

今、私としてるでしょう？

これは断じて、デートじゃない。

デートよ。若い男と若い女が、クリスマスイブに、腕を組んで歩いているのよ。

(ウラシマの腕をつかむ)

腕を組むな！(ナナコの腕を振りほどく)

どう見たって、デートよ。浮気よ。

問題は二人の気持ちだろう？ 学生の頃だって、映画を見たり、授業の帰りに喫茶店に寄ったりしたけど、デートだなんて思わなかったじゃないか。

ナナコはデートだって思ってたんだ。

思っていないわよ。

絶対に思ってた。ねえ、先生？

僕もそう思う。

うるさいわね。黙ってなさいよ。

そうだ。あいつは時計を持ってないんだ。

そう言うあなたも持ってないわね。

僕のはあいつに貸してるんだよ。大学に入った時に買ったやつでさ、安物だし、いい加減、ガタが来てると思うんだ。

時計なら、自分で選べるでしょう？

ナナコ。

わかったわかった。でも、奥さんが気に入るかどうかは、責任持たないから



ウラシマ

何だよ、恩返しって。

ナナコ

今まで、いろいろ助けてきたでしょう？ ノートを貸したり、授業の代返を

ウラシマ

したり。何かしてもらったびに、食事を奢ったじゃないか。

ナナコ

じゃ、今日も奢ってくれる？

ウラシマ

ごめん、今日はあいつが家で待ってるんだ。そうだ。正月に家に来いよ。何

ウラシマ

でも好きなものを食わせてやるから。

ナナコ

新婚家庭に行くの？

ウラシマ

あいつはあんまり料理が得意じゃないから、僕が作るよ。冬はやっぱ鍋物

ナナコ

だよ。そうだ、あいつはおでんが好きなんだ。

ウラシマ

この時計、ちようだい。

ナナコ

待てよ。車が来るぞ。

ウラシマ

いいから、ちようだい。

ウラシマ

バカ、危ない！（ナナコの腕をつかむ）

車が激しくスリップする音。車と人が衝突する音。ナナコとウラシマが飛ぶ。そして、倒れる。やがて、ウラシマがゆっくりと立ち上がる。

ナナコ

（体を起こして）あの人立ち上がったのは、ちようどあの辺りだった。カ

カブト

ブト、カメラを貸して。

ウラシマ

私がナナコにカメラを渡そうとした時――

カブト

待てよ、ナナコ。

カブト

ウラシマさんがやってきたのです。

クサナギ  
カブト  
クサナギ  
カブト  
カブト  
カブト  
ナナコ  
ウラシマ  
ナナコ  
ウラシマ  
ナナコ  
ウラシマ  
ナナコ  
ウラシマ  
ナナコ  
ウラシマ  
ウラシマ  
ナナコ  
ウラシマ

ちよつと待て。ウラシマさんはさつきからいたじゃないか。  
いませんでした。  
十五年前の話を、ナナコとしてたじやないか。  
あれは、ナナコの回想の中のウラシマさん。  
そして、今度は現実のウラシマさん？ 全然、区別がつかないよ。  
仕方ないよ。私たちに十五年前でも、二人にはたったの十五日しか経って  
ないんだから。  
カブト、カメラを貸して。  
その前に時計を返してくれ。  
カブト。  
あいつに渡したいんだ。僕らが一緒にいたのは、時計を買うためだったって、  
説明したいんだ。  
昨日会って、わかったでしょう？ 話なんか、聞いてくれないわ。  
時計を渡せば、わかってくれる。  
言い訳としか思わないわ。  
心を込めてプレゼントすれば、わかってくれるんだろう？  
何を言ってるのよ。選んだのは私よ。  
頼んだのは僕だ。さあ、返してくれよ。  
持っていない。  
どこへやった。  
捨てたのよ、あんなもの。  
それなら、それでいい。時計なんかなくなたって、ナナコが一緒に来て、話を  
してくれれば。

ナナコ  
私が行ったら、余計に怒らせるだけよ。  
ナナコのことわかってくれるよ。  
ナナコ  
わからないわよ。どうしてだと思う？ あんたが何もわかってないからよ。  
彼女（ナナコ）の気持ちも、私の気持ちも。  
ナナコ  
私だって、プレゼント、一度でいいから、ほしかったのよ。

ナナコが走り去る。

ウラシマ  
あんな高い時計、二つも買えないよ。  
カブト  
バカだな。女の子の気持ち全然わかってないんだから。  
ウラシマ  
気持ちって、何だよ。  
カブト  
それくらい、自分で考える。  
ウラシマ  
君だって、わからないんじゃないの？  
カブト  
私（カブト）はわかるよ。私（カブト）だって、女の子だもん。  
ウラシマ  
え？ 君、女の子だったの？  
カブト  
しらじらしいなあ。あんたの名前、ウラシマじゃないよね？  
ウラシマ  
どうしてそう思うんだ？  
カブト  
私の父さんも十五年前に死んだんだ。私が生まれる前に。  
ウラシマ  
君のお母さんの名前は？  
カブト  
ムロマチアカネ。  
ウラシマ  
アカネさんが、こんな男と結婚すると思うかい？  
カブト  
あの人の趣味、変わってるから。それに、あんたもプロのカメラマンだろう？

ウラシマ

母さんと同じ仕事じゃないか。  
僕はウラシマだよ。ウラシマタロウ。乙姫様を一人残して、地上に帰っちゃまったんだ。

ウラシマが歩き出す。カブトが後を追う。が、振り返って、十五年前のウラシマが立ち上がった場所に、カメラを向ける。フラッシュ。ウラシマがカブトに声をかける。ウラシマ・カブトが去る。

ムロマチがやってくる。

ムロマチ

乙姫様は、どうして玉手箱を渡したのだろう。蓋を開けると真っ白い煙が吹き出して、開けた人間を老人にしてしまふ箱。そんな恐ろしい箱を、どうして浦島に渡したのだろう。私が出した答えはこうだ。乙姫様は浦島を愛していた。それなのに、浦島は故郷へ帰ると言い出した。乙姫様を残して。そんな男を許せるはずがない。乙姫様は怒り狂った。そして、浦島への復讐を誓った。棄てるなら、棄てるがいいわ。そのかわり、戻りたくなくても、戻れないようにしてやるからね。玉手箱の中には、乙姫様の悲しみが封じ込められていた。その悲しみが、浦島を老人にしたのだ。しかし、一つだけ疑問が残る。浦島が蓋を開けずに、玉手箱を捨てたら、どうするつもりだったのか。浦島はもう一度、海に潜るだろう。その時、乙姫様は龍宮城の門を開けるだろうか。別れた時の姿で、あの人が戻ってきたら。

そこへ、アヅチ・モモヤマがやってくる。

アヅチ  
ムロマチ

先生、カズコ君の担任の先生が、今すぐ学校に来てほしいと。おまえらじゃダメだって言われたのか。

モモヤマ

そうじゃなくて、カズコ君がいなくなつたんです。昨日会つたナナコって幽霊と、どこかへ行つてしまつたらしいんです。

ムロマチ

幽霊とは仲良くなるなつて言つたのに。

モモヤマ

先生、ナナコつて、ご主人とどういふ関係ですか？

ムロマチ

同級生だよ、大学時代の。

モモヤマ

ということは、ただの友達か。でも、ただの友達がどうして一緒に死んだんですか？

アヅチ

そんなこと、聞かなくてもわかるだろう。

モモヤマ

おまえにはわかるのか？

アヅチ

恋人だつたんだよ。ご主人は先生と結婚してからも、ナナコと付き合つてたんだ。でも、それが先生にバレてしまつた。先生は「私を取るの？」ナナコ

を取るの？」と迫つた。もちろん、ご主人はナナコを取つた。二人は逃げた。

先生は包丁を持つて、追いかけた。そして――

モモヤマ

先生、あなたはなんてむごいことを。

ムロマチ

アヅチ君、冗談はそれくらいにしてくれ。モモヤマ君が本気にする。

モモヤマ

え？ 今のは嘘なんですか？

アヅチ

しかし、まさか浮気の最中に死ぬとはな。迷惑にもほどがある。

モモヤマ

カズコ君はそのことを知ってるんですか？

ムロマチ

何も話してない。死んだ時のことも、父親がどんな男だつたかも。

モモヤマ

先生は今でも許してないんですね？ ご主人のことを。

ムロマチ

それで、担任はなんて言つてたんだ。

アヅチ

実は、カズコ君の他に、アゲハつて子もいなくなりまして。二人を探すのを手伝つてほしいと。

ムロマチ　もうすぐ日が暮れる。待ってれば、そのうち帰ってくるだろう。  
モモヤマ　でも、カズコ君にもしものことがあったら、どうします？  
ムロマチ　あの女、どこまで人に迷惑をかければ、気が済むんだ。

ムロマチ・アヅチ・モモヤマが去る。カニタニ・サルサワ・ウスイケがやってくる。手には、たくさんの本。

カニタニ　どうして私たちがやらなくちゃいけないわけ？  
ウスイケ　ムロマチさんとオオシマさんが行方不明なんだって。ミドリ先生、「近所を

探してくる」って言った。

探すことなんかないんだよ。怒られるのがイヤで、逃げたんだから。

暗くなってきたね。

今日も出るかな。

全部終わったってことにして、帰らない？

でも、まだ半分もやってないのに。

あいつらにやらせればいいんだよ。大体、この仕事は、プールの水を抜いた

罰だろう？

ウスイケさん、後はよろしく。

せめて、ミドリ先生に一言言ってから帰ろうよ。

そこへ、アゲハがやってくる。手には一冊の本。

アゲハ　さよなら。

カニタニ  
サルサワ

さよならじゃない！ どうしておまえがここにいるんだ。  
先生たち、みんなであなたのこと、探してるのよ。

アゲハ  
カニタニ

そうなの？ 私は朝からずっとここにいたのに。  
(時計を示して) もうすぐ七時だぞ。十時間以上も何をしてたんだ。

アゲハ

この本を読むのに、夢中になっちゃって。まさか、そんなに時間が経ってる  
とは思わなかった。

ウスイケ

それ、何て本？

アゲハ

おもしろいのよ。読んでみる？ (カニタニに本を差し出す)

カニタニ

(受け取って) 何だよ、これ。真っ白じゃないか。

アゲハ

何も考えないで、開くからよ。夏休みに関係あることを、頭に思い浮かべな  
がら開くの。海とか川とかプールとか。

カニタニ

そうだな。たとえば、小学校の時、おばあちゃんの田舎で見た、ホタル。

カニタニが本を開く。本が黄色く光る。周囲に、虫の音が広がる。

カニタニ

(本を閉じて) 何だよ、この本！

アゲハ

おもしろいでしょう？ 頭に思い浮かべたものが、何でも映るのよ。

カニタニ

偶然、ホタルのページを開いただけじゃないのか？ (開いて) あれ？ みんな  
な、真っ白だ。

アゲハ

(本を取って) 次はサルサワさん。(差し出す)

サルサワ

(受け取って) 私は花火。小学校の時、お父さんに連れてってもらった、隅  
田川の花火大会。

サルサワが本を開く。本が七色に光る。打ち上げ花火が炸裂する音。

カニタニ

アゲハ

(本を閉じて) どういう仕掛けなんだよ、これ。

何の仕掛けもないみたい。いくら読んでも読み終わらない、終わりのない本なのよ。(本を取って) 次はウスイケさん。(差し出す)

ウスイケ

カニタニ

(本を取って) 私はね私はね、幽霊。  
バカバカバカ!

ウスイケが本を開く。そこへ、ナナコがやってくる。

サルサワ

ウスイケ

(本を見て) この人、一昨日会った人だ。

あの人、幽霊だったの？

ナナコ

いたいたいた。

カニタニ

(ナナコを見て) 出た出た出た!

ナナコ

ちよつとあんた、時計を返してくれない？

カニタニ

こつちへ来ないで!

ナナコ

何よ。まさか、ネコババするつもりじゃないでしょうね？

カニタニ

私にとりつこうたったって、そうは行かないぞ。いざとなったら、この張り手で。

アゲハ

(本を取って) 大丈夫よ。この人は何もしないから。

ナナコ

あら、幽霊を舐めてもらっちゃ、困るわ。

カニタニ

やっぱり、とりつく気だな？

ナナコ

もう半分とりついてるのよ。気がつかない？

カニタニ

ナナコ

まさか、いつの間に。  
どうして時計を渡したと思ってるの？ その時計を入り口にして、あなたの体の中に入るためよ。スルツ、グニユグニユグニユグニユグって。

カニタニ

汚いぞ！（時計を外す）

ナナコ

投げるな！ 投げると死ぬよ！

カニタニ

やめろ！

ナナコ

静かに下に置いて。そこから十歩下がって。はい、いい子だね。今日のところは勘弁しといてやろうか。（時計を拾う）

アゲハ

でも、この本には、幽霊は恨みのある人にしかとりつかないって書いてあるよ。

ナナコ

やっぱり？

カニタニ

さては、騙したのか？

ナナコ

ごめんね。そう言わないと、返してくれそうもなかったから。

カニタニ

（右手を振り上げて）歯を食いしばれ！

ナナコ

やめて。これ以上、顔が腫れたら、お嫁に行けなくなっちゃう。

カニタニ

心配するな。おまえはもう死んでいる。

ナナコが走り去る。後を追って、カニタニ・サルサワ・ウスイケが走り去る。

アゲハ

凄い本ね。『ナツヤスミ語辞典』

そこへ、ナナコが戻ってくる。

ナナコ  
アゲハ  
ナナコ  
アゲハ  
ナナコ  
アゲハ  
ナナコ

この本も返してね。(本を取る)  
ちよつと、その本はうちの学校の。  
よく見てよ。エンゼルマーク。この本は、天国の図書館で借りたの。  
ちようだい。  
あなたはいらなんでしょう？ あなたはもう持ってるんだから。  
持っていないよ。  
何言ってるの。夏休みの真っ最中のくせに。

ナナコが去る。後を追って、アゲハが去る。

クサナギ

「私とウラシマさんは、二人でナナコを探しました。駅、デパート、本屋、公園。そのうち、日が暮れてきたので、仕方なく、学校に向かいました。街灯に照らされた校門まで来ると、背後から叫び声。振り返ると、般若のような顔をした女がこっちに走ってくる。『口裂け女だ！』。私たちは逃げ出しました」

カブト・ウラシマが飛び出す。後を追って、ミドリ先生・モモヤマが飛び出す。

ミドリ先生

待ちなさい、ムロマチさん！

カブト

何だ、ミドリ先生か。脅かさないでくださいよ。

ミドリ先生

こっちに來なさい。その人から、離れるのよ。(カブトの手を引っ張って、

ウラシマに) この子はまだ中学生です。とりつくなら、私にとりつきなさい。さあ。

ウラシマ

いや、僕は別にとりつくつもりなんか。

ミドリ先生

それなら、さっさとあの世へ帰りなさい。早く。

ウラシマ

残念ながら、まだ帰れないんです。やらなくちゃいけないことがあるんで。

カブト

でも、ナナコがいないよ。時計もないし。

ミドリ先生

ムロマチさん、もう話をしちやダメ。

カブト

あと一分だけ。

ミドリ先生

先生は、あなたたちのために思って言ってるのに。

モモヤマ

だったら、あと一分だけ、話をさせてやってくれませんか。カズコ君のことを、本当に思っているなら。

ミドリ先生

でも……。

モモヤマ

（カブトに）じゃ、僕は先生を呼んでくる。（ウラシマに）先生が来るまで、必ずここにいてくださいよ。

モモヤマが去る。

カブト

ウラシマさん、ナナコが死んだ時のこと、覚えてる？

ウラシマ

覚えてるよ。僕はトラックに撥ねられて、五メートルも跳んだんだ。

カブト

どこに落ちたの？

ウラシマ

あの日はひどい大雪でね。車道の端には、雪が二十センチくらい積もってた。その雪の上に。

カブト

じゃ、顔は潰れなかったんだね？

ウラシマ

目を開けることができたんだから、潰れてなかったんだろう。とにかく、ナ

カブト

ナコのこと心配で、すぐに起きて、辺りを見回したんだ。

カブト

立ったんだね？ 両目を開けて、雪の上に立ったんだね？

クサナギ

（写真を見て）立ってるよ。おでこに右手を当てて、ちよっぴり悲しそうな

カブト

顔をして。

カブト

写ってるよね？

クサナギ

写ってるさ。



ミドリ先生

行きましよう、ムロマチさん。

カブト

さよなら、ウラシマさん。

ウラシマ

さよなら、カズコ。いい写真、撮れよ。

カブト・ミドリ先生が去る。

ウラシマ

ナナコもないし、時計もない。でも、話だけはしなくちや。

そこへ、駅長がやってくる。

駅長

よかった。間に合いましたね。

ウラシマ

僕は切符を持ってないんですけど、乗せてもらえるんですか？

駅長

もちろんですよ。お連れの方はどうしました？

ウラシマ

やっぱり、まだ戻ってきてないんですか？

駅長

ええ。残念ですが、置いていくしかないようですね。

ウラシマ

え？ でも、発車まで、まだ三時間もありません。

駅長

台風が近付いてるんですよ。ほら、風が強くなってきましたでしょう？

今夜の

ウラシマ

あと何分ですか？

駅長

十分です。

ウラシマ

そんな。ナナコを置いていくわけには行きません。

そこへ、ムロマチ・アヅチ・モモヤマがやってくる。

モモヤマ　あれ？ カズコ君は？  
ウラシマ　ミドリ先生と職員室に行きました。  
ムロマチ　カズコと一緒にいたっていうのは本当か？  
ウラシマ　ああ。駅前の十字路で、偶然会ったんだ。  
ムロマチ　話したのか、あんたのこと。  
ウラシマ　そんなことするわけないだろう？ 僕は、あの子が生まれる前に死んだんだ。  
ムロマチ　今さら、父親だなんて名乗る資格はない。  
ウラシマ　カズコには二度と近付くな。  
ムロマチ　その心配はいらないよ。僕は、今夜の列車で帰るんだ。  
ウラシマ　だったら、いいんだ。行くぞ、アヅチ、モモヤマ。  
ムロマチ　待ってくれ、アカネ。  
ウラシマ　カズコはたくさんの人に迷惑をかけた。急いで、謝りに行かないと。  
ムロマチ　その前に、僕の話聞いてくれ。頼む。  
アヅチ　行こう、モモヤマ君。  
ムロマチ　待て。私も行く。  
アヅチ　その必要はありません。謝るだけなら、僕ら二人で十分です。  
モモヤマ　カズコ君のことは僕らに任せて、先生は先生の真実を見つけてください。  
ムロマチ　カッコつけるな、バカ！

アヅチ・モモヤマが去る。

ウラシマ　アカネ、黙って先に死んで、済まなかった。おまけに、ナナコなんかと死ん

ムロマチ　　だりして。でも、ナナコはただの友達なんだ。おまえが想像してるようなこ  
ムロマチ　　とは、何もなかったんだ。

ムロマチ　　私が何を想像したって言うんだ。

ムロマチ　　だって、おまえ、怒ってるじゃないか。カズコにも僕のこと、話してないし。

ムロマチ　　あんたに何がわかる。

ムロマチ　　アカネ。

ムロマチ　　私は一人になったんだ。一人でカズコを産んで、一人で育てたんだ。

ムロマチ　　それは、本当に悪かったと思ってる。でも、ナナコとは本当に何もなかった  
ムロマチ　　んだ。

ムロマチ　　そんな話、誰が信じると思う。

ムロマチ　　誰も信じなくていい。でも、おまえだけには信じてほしい。あの日は、クリ  
ムロマチ　　スマスのプレゼントを買いに行ったんだ。おまえのための。でも、僕が選ん  
ムロマチ　　だら、気に入ってもらえないかもしれないだろう？　だから、ナナコに協  
ムロマチ　　力を頼んで。

ムロマチ　　事故の時、あんた、何も持ってなかったじゃない。

ムロマチ　　ナナコが持ってたんだよ。持ったまま、天国に来ちゃったんだ。それで、十

ムロマチ　　五年も遅くなっただけど、おまけにクリスマスでもないけど、おまえにプレ  
ムロマチ　　ゼントを渡すために、ここへ戻ってきたんだ。

ムロマチ　　何を。

ムロマチ　　それが、ナナコに持ち逃げされちゃって。

ムロマチ　　ムロマチ



ウラシマ さよなら、アカネ。カズコによろしく。

ムロマチ 伝えないよ、カズコには。

ウラシマ それでもいいよ。そう言いたかったただけなんだ。さよなら。

ウラシマ・ナナコ 駅長が去る。

ムロマチ 乙姫様の気持ちが変わった。きっと今でも、浦島太郎の帰りを待ち続けているんだ。

カブトがやってくる。空を見上げる。

カブト 銀河鉄道だ！

銀河鉄道の蒸気の音。ヤンマ・アゲハ・アヅチ・モモヤマ・ミドリ先生・アオタ先生・カニタニ・サルサワ・ウスイケ・ヤンマの母・アゲハの母・郵便屋がやってくる。空を見上げる。

カブト クサナギ先生、その写真の意味がわかりますか？ そこに写ってるのは誰で

すか？ 母さんは何も言いません。そのかわり、私がアルバムを作るのを許してくれました。最初のページには、その写真を貼りました。クサナギ先生、そこに写ってるのは誰ですか？ 私は私のカメラで、真実を写したのでしょ

うか？

クサナギが立ち上がる。

クサナギ

それは僕にもよくわからない。君の真実は君だけのものだ。でも、僕にだって、わかったことがあった。君たちの手紙が教えてくれた、僕だけの真実。玉手箱は開けちゃいけない。せっかく、終わらない夏休みが始まったんだ。終わらないかもしれないものを、自分の手で終わらせちゃいけない。ヤンマ、アゲハ、カブト、君たちの玉手箱は、海の彼方へ放り投げろ。僕の夏休みだ。って、まだまだ始まったばかりだ。

クサナギが手紙を引き裂き、空に撒く。満天の星の中へ、銀河鉄道が消えていく。

∧ 幕 ∨